序

フランシスコ会士の音楽家、作曲家、理論家の人名事典をここに編纂した。The New Grove Dictionary of Music and Musicians(2001 年版)の巻末インデックス Franciscan order をもとに、Die Musik in Geschchte und Gegenwart, その他の辞典類、出版楽譜からの情報を収集し、それらを整理して年代順に配列したものである。フランシスコ会、あるいはフランシスコ会士が音楽史において果たしてきた役割は計り知れない。

各時代を通じて脈々と途切れることなく流れるフランシスカン音楽家たちの活動は驚くべき多様性を示している。

それは創立者であるアッシジの聖フランシスコ（1182~1226）が類稀な音楽的聖人であったことに由来する。

Arnold Schering, Frank Reinisch 編による音楽史年表“Neue Tabellen zur Musik Geschichte（Breitokopf, 2003）”をひもとくと、1225 年、すなわち彼が病身をクララが住むサン・ダミアーノにあずけていた年に起こった音楽史的エポックとして次のような記述がある。

[Franz von Assisi: Sonnengesang *Altissimu, omnipotente Signore/tue sole laude*, in der frühesten Quelle ohne Noten überliefert. Vorbird für die Entwicklung der Lauda, s.auch 1270]。

この年表には作曲家、音楽理論家の生没年、写本または作品成立、出版についての情報が記されているもので、音楽家ではない聖フランシスコの生没年は書かれていない。ただし、この彼が「被造物の賛歌」をつくったということだけは音楽史上特筆すべきこととして 1225 年の唯一の音楽的出来事として記載されている。この賛歌は ohne Noten とあるように旋律は残されていない。にもかかわらず、彼がこれを歌ったということが音楽史への新たな局面を開き、キリスト教音楽の世界に新しい美を注入したということが深く認識されているのである。

この年表には音楽史の背景になる社会的事象についても併記されているが、1223 年のところに聖フランシスコの名がある。

[Franziskanerorden von Franz von Assisi gegründet, Verachtung des

Weltlichen, Rückgriff auf das Urchristenum]

この年は教皇勅書によって裁可された会則発布の年であって、年表の作者がオフィシャルな形での会の創立の根拠をそこに求めたのである。フランシスコ自身の立場にたって述べると、彼がフランシスコ会というものを作ろうと望んでそれが適った年であるということではない。「世俗を軽蔑し」「福音に従う」という彼の修道生活は会則に先立って実践されており、それはすでに大きな宗教運動に発展していた。

木切れを拾ってフィーデルを弾く真似をする、気分が高揚するとフランス語で歌い始める、病床にあって楽器の音で慰められることを求める、といった行動にみられるフランシスコの音楽への傾きは時代を経てもフランシスカンたちの中に流れ続けていると思わざるをえない。音楽史の舞台に登場する様々なフランシスコ会士たちの多様性、活動の広がりには目をみはるものがある。大聖堂のマエストロ・ディ・カペッラの地位、あるいはオルガニストの地位を求めて精進し続ける者、作曲家として活躍する者、理論家（修道院向けの平易な教科書を書く者から、画期的な新しい論を展開する者まで。そしてまたメルセンヌやツァルリーノのように音楽理論史上に突出している重要な人物も輩出している）、ソルフェージュや音楽教育の新しいシステムを考案する者、「われらの時代の音楽の神」とまで慕われ、大きな影響力を持ったパードレ・マルティーニのような者、オブセルヴァント派で音楽には厳しい抑制を見せながらも、ルネサンス期の器楽論として歴史的な意味をもつ著作を著し、なおかつ「証聖者」とされているフアン・ベルムード、音楽史上はじめて、民謡に基づくミサ曲を作曲したコルナーゴ、また、新しい楽器を発明した者たちもいる。地方語の聖歌を収集・編纂してローカルな典礼を豊かにした者、印刷に精を出し、神学書、音楽書の出版に情熱を傾けた者、教会音楽だけに献身した者、ほとんど教会音楽には目もくれず、オペラ、カンツォネッタのようなものばかりを書き、宮廷の保護者を求めて歩いていた者、カトリックに失望し、ルター派に改宗して説教者になった者、職務怠慢で蟄居させられた者、女子修道院のすぐれた音楽家の修道女に作品を献呈し続けた者、パドヴァで cori spezzati を開拓し、ヴェネツィア楽派に影響を与えたフラ・ルフィーノな

ど、その名は大作曲家中心の歴史の叙述からはこぼれ落ち、看過されてしまう者たちも、音楽史の重要な局面で大活躍しているのである。これら多種多様な傾向の者たちが同じ修道家族から輩出されているということを知るにつけて、「貧しいもの」「小さきもの」「平凡でとるにたらないもの」とみずからを名乗ったフランシスコの偉大さを再認識し、感動する。

17 世紀に活躍したヴァイオリニスト、ブオナメンテ(1７ｐ参照)の伝記が“Franciscan violinist(Peter Allsop, 2005)”として最近刊行された。その訳出をはじめ、フラ・ルフィーノの再評価、ポルタを中心とするパドヴァ楽派のルネサンス音楽史における位置づけなど、今後の研究テーマもこの人名録の作成によって私に新たに与えられた。

フランシスカ・杉本ゆり

2012 年　灰の水曜日

（2021 年、10 月に 16~17 世紀のイタリア人フランシスコ会士 5 人を加えて改訂した。）

音楽史上に残るフランシスコ会士

杉本ゆり編

+ Haymo of Faversham　c1175-1244　イギリス

典礼学者。フランシスコ会 4 代目総長。1226 年、パリでフランシスコ会に入会、後にパリ大学で神学教師としても名声を博す。1234 年にイタリアのボローニャ、パドヴァなどで教える。1239 年イングランドの管区長になり、40 年に総長に選出される。教皇庁の許可を得て、聖務日課書、ミサ典書の改訂を始める。音楽史における重要性はフランシスコ会の典礼改革をしたことにある。ひいてはこれがローマ典礼の統一に結びつく。

+ Enrico da Pisa　?-1247　イタリア

サリンベネの歌の教師。イムヌス、セクエンツィアの作者。“Homo quam sit pura(AH21)”の旋律、セクエンツィア“Virgo parens gaudea(AH カプアのトマス作)”の旋律作者だと言われている。

+ Thomas de Celano　1190-1260　イタリア

フランシスコの伝記作者。1215 年フランシスコ会に入会。1221 年にドイツへの最初の宣教団に加わる。1223 年レノの修道院長となる。1228 年、30 年にアッシジに行く。教皇グレゴリウス 9 世の命により 1228~9 年にかけてフランシスコの第一伝記を書く。続いて 44 年から 47 年にかけて第二伝記を、イエジのクレツェンツィオ総長の命によって書く。1250 年ころ「奇跡の書」また聖クララの伝記も書く。フランシスコのためのセクエンツィア“Sanctitatis nova signa”,“ Fregir victor virtualis”を書く。セクエンツィア作者として名高く Dies irae の作者とも言われていたが、真偽は明らかではない。しかしテキストに手を加えた一人であった可能性はある。

+Bartholomeus Anglicus　before 1200-1272 イギリス

神学者。オックスフォードで、後にパリで神学を学び 1225 年頃フランシスコ会に入会。マグデブルクで教師となり、続いて 1247 年にオーストリア、ついでボヘミアで 1225 年に教える。Łuków で 1257 年に司教になり、教皇使節に選ばれる。没する数十年前からはサクソニーの管区長であった。マルデブルク時代に“De proproetatibus rerum(c1245)”を完成し、音楽について言及。この写本は 100 以上が現存する。

+ Bacon, Roger　1214-1292　イギリス

神学者、哲学者。Doctor Mirabilis(驚異的博士)と言われた。オクスフォードでグロステストのもとで学ぶ。その後パリに行くが、そこでの勉学をあきらめ、再びオクスフォードに戻る。1255 年頃フランシスコ会に入会、1227 年叙階。ナルボンヌの枢機卿ギー・ド・フールク(後のクレメンス 4 世教皇)の勧めで 1265 年ころ、“Opus maius”, “Opus minor”, “Opus tertium”を書く。彼は音楽についても言及し、ボエティウスの伝統に従って音楽を mundana, humana, instrumentalis に分類した。

しかし mundana に関しては人間の耳に感知できないようなものを音楽に含めることについては疑問を呈している。カッシオルドゥスに従って器楽音楽を打楽器、弦楽器、管楽器にわけているがこれは今日と同じである。humana に関しては歌とスピーチに分類し、後者にはプローズ、韻文、などが入る。さらに音楽は、見えるもの、聞こえるものとしてとらえ、最後にダンスや体の動作（ジェスチャー）も分類した。あらゆる美的経験を抱合した彼の主張ー音楽は音、踊り、詩の同義語であるとする考えはアル・ファーラービーに遡及する。ベーコンは音楽の知識は神学研究に対しては本質的なものであり、礼拝の実践を強めるものであると考えた。また倫理的、霊的生活に貢献するものであると。人間の気分や健康、脈拍に及ぼす音楽の効果を研究すべきであると推奨した。踊りやジェスチャーの芸術を理解することは宣教に必要であるとした。ダイアトニック、クロマティック、エンハーモニックの議論について、ベーコンはボエティウスや教父たちの伝統に従い、エンハーモニックが最も聖歌にふさわしく音楽をさらに発展させるものであるとした。彼は当時の教会音楽にファルセット唱法がはびこることを批判。主要な大聖堂や有名な神学校に新奇な自堕落な作法が蹂躙していることを指摘した。また質の高いイムヌスが衰退したことを嘆き、これは韻律作法の知識の欠如であると指摘した。音楽の重要性を決して見過ごしてはならない。あらゆる美はハーモニーと比例から来るのであり最終的には数学的な分析による、ここにのみ真理はあると主張した。

+ Julian von Speier　?-1285　　ドイツ

聖歌隊指揮者、作曲家、典礼音楽家。パリで神学を学び、フランス王室の Magister
cantus を務め、典礼音楽のエキスパートとして力を発揮する。1227 年ころ、ファーヴァーシャムのハイモらと共にフランシスコ会に入会。しばらくドイツ宣教に従事したが、1230 年以降にパリに戻り、そこで現存する 4 つの作品、すなわち「聖フランシスコの韻文聖務日課」「聖フランシスコの生涯」「聖アントニオの聖務日課」「聖アントニオの生涯」を書く。これらの韻文聖務日課はその完璧な構築性により、韻文聖務日課の規範となり、トリエントの公会議後も教会の宝として生き続けた。

+ Salimbene de Adam　1221-1288　　イタリア

年代記作者。13 世紀のイタリア音楽について述べている。フランシスコ会の Enrico da Pisa, Vita da Lucca に歌を習っている。

+Jacopone da Todi　c1228-1306?　　イタリア

詩人。法律家であったが、若い妻の死をきっかけに 1268 年、宗教生活へと回心し、1278 年、フランシスコ会に入会。聖霊派に属し、多くのラウダを書く。教皇ボニファチウス 8 世との対立により、5 年間投獄された。彼の詩作の主なものは 92 曲のラウダである。ラテン語のセクエンツィア Stabat Mater が彼に帰せられているが疑わしい。彼の詩は初めフランシス会内で知られるにすぎないものだったが、ラウダは後に広くトスカナ地方にも広まり、ラウデージの信徒会によりコルトナ写本 91

に残されることになった。コルトナには 2 曲、フィレンツェには 5 曲以上の彼のラウダが楽譜で残る。

+Egidius de Zamora　fl1260-1280　　スペイン

理論家、カンティガスで有名なアルフォンソ 10 世の息子の家庭教師。“Ars Musica (1270)” をフランシスコ会の総長に献呈。ボエティウス、プラトン、ニコマコス、グイド、イシドルス、エジプトの文書、聖書、アル・ファーラービーなどについての伝統的な深い知識を持ち、彼の論文はモノコルド、数比、ソルミゼーション、ギリシャ理論、旋法やエートスなどを扱う。長いセクションを楽器の用語辞典、語源、象徴論にあてている。さらにスペインでよく知られているギターやカヌーン、ルバブのような楽器についても述べである。さらに彼は organa と言う言葉をオルガンに対する特別な意味で使った。「この楽器だけが教会のなかで様々な聖歌、プローズもセクエンツィアもイムヌスも伴奏することができる。他の楽器は吟遊詩人たちが使うものであるから禁じられる」と述べている。

+Tunstede, Simon　?-1369　　ブリストル

理論家。1351 年にノルウィッチのフランシスコ修道院の神学院校長であった。オクスフォードのフランシスコ会寮院長。60 年から 69 年までイングランドの 23 代目管区長。“Quatuor principalia musice” の著者と言われている。これは無名のフランシスコ会士が書いたものとされていたが、事実は John of Tewkesbury 著である。彼が書いたのはアリストテレスの Meterrica と Albion についてである。

+ Cornago, Johannes　c1400-after 1474　カタロニア

スペインの最初期の作曲家。1449 年、パリ大学で神学の学位。1453 年にはすでにアルフォンソ 1 世に仕え、彼の名声は確立していた。1455 年 10 月 12 日、フランシスコ会入会と推定される。1466 年にはアルフォンソの後継者フェランテ 1 世に仕え、最後の記録は 1475 年、カトリック王フェルディナンドの宮廷に歌手として存在していた。残された作品にはミサ、モテット、スペイン語、イタリア語によるポリフォニー楽曲がある。Recent Researches in the Music of the Middle Ages and Renaissance,15 に全集あり。

+Johannes de Erfordia　fl c1465-75　　ドイツ

作曲家。おそらくエルフルト生まれ。現存する彼の 5 曲の作品は Johannes Bonadies によって写譜され、15 世紀の Faenza Codex に所収されている。そしてそこからマルティーニ師が筆写している。Ave regina caelorum, mater regis は未完であったと思われる。Kyrie, Sanctus はおそらく循環ミサだったのだろう。模倣開始のイニシャルが同じものを使っている。あと 2 つの作品はイタリア語で、“Doloroso mi tapinello”, “Non so se l’è la mia cupla” 両方とも非常にシンプルなシラビックな様式である。

+ Bonaventura da Bresia　fl 1487-97　　イタリア

理論家。コンヴェンツアル・フランシスコ会士。1487 年にパドヴァで勉強した記録はあるが、その後ブレーシアのフランシスコ修道院で活動。フランシスコ会士の要望により、「貧しく単純な修道者のために」音楽の基礎について小論文を書き、“Breviloquim musicale(1497)”というタイトルのもとにブレーシアで出版した。しかしその後の再版は“Regula musicale planade”となっている。42 の小さな章からなっており、グイドの手、譜線、音名、ヘクサコードとそのプロパティ、クレフ、ムタツィオ、音程の 13 の種別、旋法、イントネーションについて書いている。章の頭はラテン語だが本文はほとんどがイタリア語であり、広く読まれた。ボナヴェントゥラの旋法の説明や３つのセミトヌスについてはパドヴァのマルケッティに基づいている。

+ Cisneros, Francisco Jimenez　1436-1517 スペイン

オブセルヴァント派のフランシスコ会士(1484 年、トレドで入会)。トレド大司教（1495~1517)、異端審問長官、. 民法、教会法博士。アルカラとサラマンカ大学に学ぶ。イサベルとフェルナンド 5 世の忠実な協力者としてスペインのカトリック統合を支援。多国語対訳聖書の出版を促進。モザラベ典礼の復興運動を起こし、トレドのモザラベ典礼における聖務日課の発展に貢献。“Intonalium Toletanum”他を出版。

+ Ruffino d'Assisi　c1490-1532　　イタリア

作曲家。コンヴェンツアル・フランシスコ会士。Bartolucci Ruffino が本名だが、アッシジ出身のため、アッシジのルフィーノと呼ばれる。ヴェネツィアのフラーリ修道院にいたと思われる。1510 年から 20 年までパドヴァ大聖堂のマエストロを勤め、その後アントニオ大聖堂に移り、1525 年まで勤める。その年、ヴィチェンツァ大聖堂に移る。31 年に再びパドヴァに戻り、少なくとも 1 年は勤める。ミサ 1 曲、２つのモテット、９つの詩篇、２つの世俗曲が残る。彼の宗教作品は、時にぎこちなく見えても冒険的で、進取の作風がある。モテットは荘厳なテキストに低音が充実している。O inexsimatible sacramentum はホモフォニーを柔軟に導入して表現を高め、Misrere mei では、より対位法的で、バスの声部に長音価でカンテォス・フィルムスが置かれている。８声の詩編曲の数々はすべて 2 重合唱で、ウィラールトの行った分割合唱による詩編(1550)を先取りするものである。作品は現在パドヴァの Centro studii Antoniani から Corpus Musicum Franciscanum, 2；Opere sacre e profane として出版されいている。

+ Waldis, Burkhard　c1490-1532　　ドイツ

神学者、プロテスタント詩人。イムヌス作者。1522 年、リガでフランシスコ会に入会。23~4 年には修道院からローマに派遣される。ラトヴィアで勃興してきた宗教改革に対して防御を支えるためである。ニュルンベルクを通って帰還する途中で、何人かの仲間と共に数週間、投獄される。ローマ滞在中に受けた司祭たちのよからぬ振る舞いと世俗化を目に

した彼は修道会を去ってルター派になる。彼は結婚して板金職人になり、あちこち旅をすることになる。宗教改革を活発に推し進めたことにより1536~40 年まで幽閉され、チュートン騎士団によって苦しめられる。1541 年にウィッテンベルク大学に入学し、44 年には牧師となりAbterode の大教会牧師となる。彼は広く詩人として認められ、特に De parabell vam vorlorn が有名。

+ Molina, Bartolome de　fl 16th century　スペイン
　理論家。神学博士。フランシスコ会士。“Arte de canto llano Lux videntis dicha(1504)をバリャドリードで出版。譜線のかわりに 1 本の線を用いるときの様々な旋法の聖歌の書法について述べられる。

+ Canuzi, Pietro de　fl 16th century　イタリア
　理論家。“Regula florum musices(Firenze,1510)”

+ Picitono, Angelo da　fl 16th century　イタリア
　理論家。“Fior angelico di musica(Venice, 1547)”

+ Bermudo, Juan　c1510-after1559　スペイン
　理論家。1525 年頃、アンダルシア管区でオブセルヴァント派のフランシスコ会入会。すぐれた説教者、証聖者でもあった。ポリフォニー音楽を奨励しないオブセルヴァント派にあって音楽に献身。セビリアで基本的な勉強をした後、Alcala de Henares 大学で数学を学ぶ。アルカラの教授 Pedro Ciruelo が音楽は 4 科学のなかで最高ものだとしているのにもかかわらず彼は音楽理論の勉強を控えた。オプセルヴァントは音楽を低くみなしていたからである。しかし、深刻な病気に見舞われてから、彼はそれに取り組むようになった。病気の回復期に彼は教会と修道会のためにこの研究を続けるべきという使命感を感じ、1549 年から 1555 年までの間、目覚しい出版活動が最高潮に達した。1560 年、アンダルシア管区理事になる。“El libro primero de la Declaracion de instrumentos(1549)”, クララ会の要請で、“El arte tripharia(1550)”（聖歌、ポリフォニー、オルガンについて）“El libro llamado Declaracion de instrumentos musicales”(1555)を書く。正確さというものに尋常ではない情熱を持つ人だったと伝えられる。

+ Pioninier, Johannes　?-1573　フランス
　作曲家、イタリアで活躍。ロレトのサンタ・カーサで歌手を務めたあと、1541 年に合唱長になり、1564 年、マエストロになる。没するまでこの職を務め、彼のあとはポルタが継ぐ。ガルダーヌ社は彼のモテットを 1548, 1561, 1564 年、3 冊刊行している。写本のまま残されたモテットと 1 曲のマドリガルがある。

+ Aiguino da Brecia Illuminato　fl 1562-1581 イタリア
　理論家、フランシスコ会修道士。Pietro Aaron の影響を受けている。著作 “Illuminata de tutti I tuoi canto fermo(1562)”で単旋律聖歌にたい

する旋法理論を扱っている。聖歌の旋法の識別をアンビトゥス（オクターヴより広いか狭いか）によって、また１つ以上の旋法にまたがっているかなどの問題にページを割いている。“Testo illuminato di tutti I tuoi di canto figurato(1581)”ではこれをさらに多声音楽にも広げて言及している。個々の旋法固有の性格を作曲者はテキストからふさわしく選ぶことが勧められる。

+ Pasquale, Bonifacio　?-1585　　イタリア

作曲家、1565 年 11 月にボローニャのフランシスコ修道院の修道士となった記録がある。1567 年に同所でマエストロになる。その後パドヴァに移り、1569 年から没するまで聖アントニオ大聖堂でマエストロを務める。76 年に 30 ドゥカを支払って詩編集を出版する。84 年、ピアチェンツァ大聖堂のマエストロの依頼が来たが、断っている。彼はパドヴァのアカデミアの会員であった。知られている唯一の作品は“I salmi che si cantano tutto l’anno al Vespro..et un Magnificat”(Venice, 1576)である。

+ Zarlino, Gioseffo　1517-1590　　イタリア

この時代の最も傑出した理論家、作曲家。彼の“Le istitutioni harmoniche”は音楽理論史上、記念碑的な著作である。カプチン会の学校で初等教育を受けたと推される。初誓願は 1532 年で、39 年にフランシスコ会士となった。36 年に Chioggia 大聖堂で歌手として、39－40 年はオルガニストとして働いていた記録がある。おそらく 1540 年に叙階。なぜならその年の 4 月から Chioggia のフランシスコ会聖歌隊学校で指導を始めるからである。彼は 1541 年にヴェネツィアに行って、ウィラールトの弟子になる。彼はまた論理学と哲学を Cristoforo da Ligname にギリシャ語を Guglielmo Fiammingo に、またヘブライ語を Elia Tesbite の甥あるいは孫に教わる。ウィラールトの同門の弟子ローレが辞職したため 1565 年、ヴェネツィアのサン・マルコ教会のマエストロに就任する。そして没するまでこの職を務める。同年に S.Servo 教会のチャプレンに選出されている。83 年、Chioggia 大聖堂の参事会員に選出されている。彼の弟子のなかにはメールロ、クローチャ、ディルータ、ヴィンチェンツォ・ガリレイ、アルトゥージがいる。

+ Porta, Costanzo　c1528-1601　　イタリア

この時代の傑出した作曲家、理論家、教師として同時代人から賞賛されている。コンヴェンツアル・フランシスコ会司祭。多くの宗教作品を残し、また教師として、次世代の多くの若い作曲家たちに多大な影響を与えた。フランシスコ会に入会して、古典、哲学、神学を学ぶ。おそらくクレモナの Porta S.Luca で学業を収めた。少し後にカサルマジョーレに移り、そこで修練期を過ごし、記録はないが、叙階されたと思われる。1549 年ころ、ヴェネツィアの S.Maria Gloriosa dei Frari に移り、サン・マルコ教会のﾏｴｽﾄﾛであったウィラールトの弟子になる。同門の仲間にはメールロ、ツァルリーノがいた。メールロとの深い友情は長く続く。1552 年にオシモ大聖堂のマエストロの地位を得、13 年勤める。65 年にパドヴァ大聖堂のマエストロの要請を受けるが、修道院全体が賛

同することを要求した後に、この職務につく。1565 年、フランシスコ会の総集会の折に聖霊降臨の儀式を彼に委ねた。彼はその折にコジモ・デ・メジチ 1 世や当時枢機卿であったカルロ・ボロメオ、フェリーチェ・ペレッティ（後のシクストゥス 5 世）らと会っている。彼はこの際、13 声のミサ Missa Ducalis を作曲し、13 番目の声部はカントゥス・フィルムスとし ‘Protégé zcosmus ducem principemque Franciscum’ と歌い、この儀式を祝した。ポルタは長くパドヴァに留まらなかった。ラヴェンナの枢機卿に乞われて 1567 年にラヴェンナに移る。ポルタは 7 年間、この地の音楽の発展を支えた。その後、ロレトのサンタ・カーサに移り、78 年に最初のミサ曲集を出版する。カルロ・ボロメオは彼をミラノ大聖堂に招聘することを望んで、果たせなかった。翌年、彼は少なくとも 2 つの重要な音楽活動の中心地に訪れている。一つはフェッラーラのエステ家の宮廷の concerto di donne である。そこでルツァスキに会っている。マントヴァのゴンザガの宮廷ではヴェルトに会っている。どちらの地でも彼はマドリガルによって喝采を浴びた。彼の名声は広がり、87 年には Congregazione dei Signori Musici di Roma の会員に選ばれる。そこにはパレストリーナやラッソーがいた。ポルタはまた重要な教師でもあり、手堅い職人芸と対位法書法のコントロールは彼の弟子達の作品に反映されている。ディルータやヴィアダーナも彼の弟子である。1589 年、パドヴァ大聖堂に、紛糾が起こり、ジョヴァンイ・バッチスタ・モストの代わりにポルタが選ばれる。95 年、再びアントニオ大聖堂の監督となる。長年、フランシスコ会に貢献してきたことが讃えられ ‘magister musicae’ の称号を受ける。しかしラヴェンナの枢機卿の保護を失ったあとの彼は不遇で、晩年は、アシスタントー実際には彼の後継者であったバルトロメオ・ラッティとの陰謀や嫉妬により、また病気により悩まされ、1601 年に没する。フランシスコ関係の音楽作品あり。“Plaudat frater/Spoliatis Aegiptiis/Absit gloriari” 彼の全集はパドヴァの Centro studi Antoniani からのシリーズ ‘Corpus Musicum Franciscanum’のなかに所収される。

+ Piccioli, Giacomo Antonio　fl 1587-8　イタリア

作曲家、コンヴェンツアル・フランシスコ会士。ヴェルチェリ大聖堂のマエストロ。ポルタの弟子であった。1587 年、"Missa, cantica <Mariae verginis ac sacrae cantiones octo vocibus concinendae”を刊行。翌年もヴェルチェリで “Canzonete a tre voci” を刊行。また “Missarum quique vocum(RISM 15881)” や、“Missae quartor, quinque vocibus decantandae(1588 4)” にも彼の作品は所収されている。

+ Sorte, Bartolomeo　?-1601　イタリア

作曲家、1547 年からパドヴァ大聖堂のトロンボーン奏者としての記録が残る。Bartolomeo dal Trombone の名で知られる名手であった。記録によると、奏者としての収入は年々増加。聖歌隊が一時解雇されたときは歌手も勤め。る 93 年 3 月に “Vespertina omnium solemnitatum psalmodia” を献呈し、同年 5 月には職務も確保され、給料も上がった。1600 年の終わりまで彼の雇用記録があるが、オルガニストも勤めてい

たことがわかる。聖アンブロジウス、アウグスティヌスへの讃歌、ミサ、晩課、マドリガルなどを残す。

+ Cartari, Giuliano　c1536-1613　　イタリア

作曲家、歌手。コンヴェンツアル・フランシスコ会士。1567 年にパドヴァのアントニオ大聖堂に歌手として雇われる。69 年にも更新されている。その後ボローニャのフランシスコ会のマエストロになり同修道院に住む 73 年から 90 年までそこにいたと思われる。91 年 11 月 30 日付の記録によると彼は修道院から罷免されている。なぜなら「彼はその典礼奉仕に喜びを見出さなかったから」とある。ボローニャを後にして、彼はイエジ、ファエンツァ、リパトランソーネで活動する。94 年にボローニャに戻るが、マエストロの任に就いたのは 1601 年のみで、1606 年から没するまではマエストロではなく、音楽教師として Giannantono da Cento と働く。作品はすべて修道会のためのもので、典型的な反宗教改革の理念に基づく。

+ Vespa, Girolamo　c1540-after1596　　イタリア

作曲家、1568 年、ナポリでコンヴェンツアル・フランシスコ会に入会。1575 年にオシモ大聖堂のマエストロ二なり、84 年にフェルモ大聖堂のマエストロとなり、91 年まで勤める。91 年、4 冊目のマドリガル集の献呈の辞を見るとオシモ大聖堂の地位に戻っていることがわかる。96 年、同修道会から‘magister musicus’の称号を受ける。彼は教会音楽の作曲家としてまたマドリガル作曲家として両方で名声をほしいままにする。後期のマドリガルにはマニエリスムの様式がみられる。

+ Balbi, Lodvico　c1545-1604　　イタリア

作曲家、コンヴェンツアル・フランシスコ会。ヴェネツィアのサンタ・マリア・グロリオサ・デイ・フラーリでフランシスコ会に入会。パドヴァで同修道会の Porta の弟子になる。70 年から 78 年まで、当時、ツァルリーノがマエストロをしていたヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂の歌手を勤める。78 年、サンタ・マリア・グロリオサのマエストロを 4~5 年勤める。80 年、パドヴァ大聖堂の合唱長の試験に失敗したが、85 年、アントニオ大聖堂のマエストロに任命される。93 年には Feltre 大聖堂で同じ地位に就く。97 年、トレヴィソ大聖堂に就くためにそこを去る。96 年、同修道会は彼を、ポルタやヴェスパと共に‘maetro dell’ordine’という称号を与える。98 年にトレヴィソを去り、サンタ・マリア・グロリオサに戻り、ヴェネツィアで没する。“Musicae essercitio”はよく知られたマドリガルを最上声におき、下 4 声を彼が加えると言う手法をとっている。彼の作品はまだあまり十分に研究がされていない。しかし音楽的には大きな興味がもたれるべきである。

+ Colombani, Oratio　c1550-1595　　イタリア

作曲家、ヴェルチェリ大聖堂のマエストロであった 1579 年、“Harmonia super vespertinos omnium solemnitatem psalmos”を

刊行し、そのなかで 67 年から 74 年までラヴェンナで Porta の教えを受けたと書いている。またミラノのフランシスコ教会（1584）、ブレーシアのフランシスコ教会（84－85）、ヴェネツィアのサンタ・マリア・グロリオサ・デイ・フラリ（85－87）のマエストロ、またウルビーノでも 91 年 5 月と 92 年 3 月に、勤めている。92 年からパドヴァの聖アントニオ大聖堂のマエストロ。93 年に聖歌隊の一時的な解雇があったとき、彼は 94 年 2 月にその地位に復職し、95 年の 4 月まで勤めるが、その地位は再びポルタに与えられた。彼の作品はあまり研究されていない。作品はポルタの対位法書法を示しているが、旋律の音型や装飾は 17 世紀初期に通じる様式が見られる。

+Vecchi, Orfeo　c1551-1603　イタリア

作曲家。ミラノのサンタ・マリア・デ・スカラのマエストロ。別の史料によると、ヴェルチェリで教会音楽の訓練を受けキャリアを開始したことがわかる。70 年には同地の Collegio degli Innocenti の歌手を務め、おそらく文法と歌唱を教えていた。また、サンタ・マリア・デ・スカラの監督であった。1581 年、ミラノでカルロ・ボロメオのもとでフランシスコ会入会。初めはノヴァラ大司教の助祭であった。次にカザーレ枢機卿の助祭となる。彼は常に教区司祭のメンバーとして働いた。作曲の速さで知られた。宗教曲のみを多数作曲し、トリエント改革の方針に従ってテキストの明確さを重んじる手法をとった。

+ Ammon, Blasius　c1560-1590　オーストリア

作曲家。インスブルックでフェルディナンド 1 世の宮廷礼拝堂の少年聖歌隊員だった。後にヴェネツィアに行ってさらなる勉強をする。変声期後、戻ってきて 1580 年にフランシスコ会で働く。1585－7 年までシトー会、聖十字架修道院でカントールを勤め、その後ウィーンのフランシスコ会に入り、後に誓願、その 3 年後に没する。ヴェネツィア音楽の影響を強く受けたアルプス以北の 16~17 世紀初頭の多くの作曲家の最初の人であった。ガブリエリの楽派といえる。

+Borsaro, Arcangelo　fl1587-1616　イタリア

作曲家、修道士、教会音楽を多数作曲しているが、教会内では要職についていない。彼の霊的カンツォネッタ“Pietosi affetti(1597)”は人気があり 1616 年まで通奏低音つきで再版され続けた。1600 年以降はヴィアダーナの小規模コンチェルタート様式を模倣した多くの北イタリアの作曲家の一人になったが、ミサ曲、レクイエム、聖務日課の音楽においては伝統的な書法を守った。

+Ghizzolo, Giovanni　?-1625?　イタリア

作曲家、コンヴェンツアル・フランシスコ会士。1609 年にはノヴァラに住んでいたが、10 年にはミラノに移っている。13 年から 15 年まで Coreggio の Prince Siro のマエストロであった。18 年にはラヴェンナ大聖堂で働いていた。21 年 10 月にパドヴァのアントニオ大聖堂のマエストロに任命されるが、パドヴァに到着したのは 22 年 8 月である。1 年間ここに滞在してノヴァラに帰る。彼は多くの教会音楽を書き、また世俗

音楽も同等に書いた。マドリガーレやカンツォネッタも含まれているが多くはモノディである。二重唱や対話形式の楽曲モアリ、ジュリアーニの Il pastor fido からの'Giuoco della cieca に作曲している。しかし全体として彼の世俗音楽は成功したとはいえない。モノディストであった同時代の作曲家たちに比べて、新しい流れのなかで旋律性に乏しかった。教会音楽作曲家としては保守的な作法と斬新的なものの中間に位置している。'Concerti'というタイトルのもとに出版されたモテットだけは当世風のテクスチュアを採用している。1611 年の 'Concerti"は、'all'uso moderno'と書かれてはいるが、華やかさのない模倣的なポリフォニーである。1613 年のミサ、モテット集では時代遅れのフォルソボルドーネを用いている。モテットにおいてのみモダンなコンチェルタート様式を取り入れ、詩編やミサの音楽はすべて 4~5 声か二重合唱様式になっている。

+Graziani, Tomaso　c1550-1634　イタリア

作曲家。1572 年フランシスコ会に入会、ミラノのフランシスコ会のマエストロ。1587 年"Missa cum introitu ac tribus motectis"と"Psalmi omnes ad Vesperas cum Magnificat"を出版。翌年 6 月には師であるポルタの跡を継いでラヴェンナ大聖堂のマエストロになる。ポルタの推薦で 98 年に S Stefano,Concordia のマエストロになり、5 年勤める。1603 年にラヴェンナ大聖堂は再び彼を招聘するが、次の契約はもはやなく、Reggio nell 'Emilia のマエストロになる。1627 年の出版物 "Responsoria in solemnitate Patrics Seraphici Francisci(1627)"のタイトルページによると、彼は Bagnacavallo のフランシスコ修道院で音楽監督をしている。作風はポルタゆずりの手堅い対位法書法があらわれている。

+Diruta, Girolamo　c1554-after1610　イタリア

オルガニスト、教師、音楽理論家。オルガン奏法についての包括的な論文 "Il transilvano　dialogo sopra il vero modo di sonar organi…" （ヴェネツィア、1593, 1609）を書いた最初の理論家。オルガンを "楽器の王" と名づける。他の鍵盤楽器との違いを明確に論じた。1572 年にオルガニストとしてのキャリアを始める。74 年に Reggio nell'Emilia 近郊の Corregio でフランシスコ会に入会。1580 年頃、ヴェネツィアに行き、ツァルリーノ、ポルタ、メールロと知己を得る。メールロは 84 年にヴェネツィアを去っているが、その前に彼はメールロに師事していたはずである。メールロは彼を高く評価している。93 年、Chioggia 大聖堂のオルガニストになり、1602 年までそこで勤める。1609 年にはグッピオ大聖堂オルガニストになっている。1593 年、彼は dialogo の 1 巻をポーランド国王の甥にしてトランシルヴァニアの王子 Zsigmond Bathory に献呈した。2 巻は 1609 年にレオノーラ・オルシーニ・スフォルツァ公爵夫人に献呈した。

+Navarro, Juan　c1550-c1610　メキシコ

スペイン生まれのメキシコの作曲家。フランシスコ会司祭、証聖者、聖歌歌手としてメキシコの Michoacan 管区で働いた。彼はメキシコで印

刷された豪華装丁の単旋律を含む「受難曲」に基づいてヨハネ受難曲を作曲した。また聖週間全体にわたる音楽を完成し、1601 年に 12 年間の出版独占権を得るが、実際にはこの“Liber in quo quatuor Passiones Christi Domini continentur…octo Lamentationes oratioque Hieremie Prophete”は 1604 年まで出版されなかった。彼はレスポンソリウムなどの個々の単旋律に作曲している。それらは大部分がシラビックであるが、時折、劇的な強調のためにメリスマが使われる。

+Belli, Giulio　c1560-after1620　　イタリア

作曲家。1569 年以前にナポリで Giovanthomaso Cimello に師事していた。それから Longiano に戻り、1579 年フランシスコ会に入会。1582 年イモラ大聖堂マエストロになる。1590 年、Carpi のサンタ・マリア聖堂で同じ地位に 3 年の契約で就くが 91 年にはボローニャのフランシスコ教会に移る。92 年、93 年にフェラーラにも行っていたようである。94 年、95 年にヴェネツィアの Ca' Grande 教会のマエストロとなり、96 年、Montagnana の大聖堂でマエストロ、97 年、Alfonso II d'Este 公宮廷とフェラーラのアッカデミア・デッラ・モルテのマエストロ、99 年にはオシモ大聖堂のマエストロを勤める。1600 年からはラヴェンナの大聖堂と神学校でマエストロを勤め 1603 年にはフォルリ大聖堂のマエストロになる。1606 年の初め、Ca' Grande に戻り、5 月にパドヴァのアントニオ大聖堂に行き、1608 年まで勤める。1610 年にアッシジのフランチェスコ大聖堂のマエストロになり、11 年から 13 年まで再びイモラ大聖堂に戻り、15 年には Ca'Grande に戻る。21 年再びイモラに帰る。同時代人の証言によると、彼はヴィルトゥオーソで、大変、徳のある人物で最高に有能であった。初期の宗教作品はパレストリーナと北イタリアの流れを汲んでいるが、後期は小編成のコンチェルト様式を示し、通奏低音も含み、同時代の実践を熟知していたようである。もともとア・カペラで作曲した作品に通奏低音をつけて後に出版している。

+Bona, Valerio　c1560-c1620　　イタリア

作曲家、フランシスコ会士。ミラノ、ヴェネツィアと関係が深い。彼の作品のいくつかはそこで出版されているからである。おそらくポルタの弟子。1591 年、ヴェルチェリのフランシスコ教会のマエストロになる。96 年にはミラノのフランシスコ会に、99 年にはモンフェラットに、1691 年にはモンドーヴィに、11 年にはブレーシアのフランシスコ会にいたことがわかっている。1613 年から亡くなるまではヴェネツィアの S Fermo Maggiore にいたようである。そこで prefetto della musica として働き、またアッカデミア・フィラルモニカとも関係を持っていた。彼はプリマ・プラティカからセコンド・プラティカに移行する時期のヴェネツィア楽派の多作な作曲家である。ミサ曲では厳格な対位法書法でパレストリーナを思わせる様式を取り入れるが、カンツォネッタなどではガブリエルのような二重合唱とモノディを組み合わせた斬新な様式を試みている。理論書に“Regole del contraponto(1595)”がある。

+Viadana, Lodovico　c1560-1627　　イタリア

作曲家、この時代の最もすぐれた影響力を持つ一人。教会音楽における通奏低音付き声楽コンチェルトの発展に刺激を与えた。1588 年以前にオブセルヴァント・フランシスコ会に入会。ポルタの弟子であったという説があるが、明確な証拠はない。1594 年から 97 年までマントヴァ大聖堂、また同じ頃パドヴァにも滞在している。1602 年、クレモナの聖ルカ修道院のマエストロ。1608 年から 9 年までヴェネツィア近郊、コンコルディア大聖堂で、10 年から 12 年まで、ファノ大聖堂のマエストロ、1614 年にボローニャ管区（フェッラーラ、ピアチェンツァ、マントヴァを含む）の diffinitor に指名される。23 年にそこを去り、ブセットに住む。その後グアルティエリの聖アンドレア修道院に移り、そこで没する。宗教曲多数。

+Ratti, Bartolomeo　1565-1634　イタリア

作曲家、歌手、オルガニスト。パドヴァ出身。アントニオ大聖堂付属学校で学び、ポルタに作曲を師事する。91 年、アントニオ大聖堂の聖歌隊にテノールとして入り 93 年、同教会の organetto dei concerti の奏者の地位を得ようとして試験に失敗するが 94 年にその地位を獲得し、歌手としても勤める。94 年、Gemona del Friuli のマエストロになる。その後パドヴァに戻りポルタの代理を務めるがポルタの死後 1601 年に跡を継ぎ、アントニオ大聖堂のマエストロになり 1606 年まで勤める。ピアチェンツァのフランシスコ教会で短期間マエストロを勤め、08 年にパドヴァに戻る。13 年、職務怠慢で解雇され、アントニオ修道院の一角で閑居して没する。宗教曲多数。

+Zaccardi, Florido　fl 1577-1604　イタリア

作曲家、メッシーナに生まれフランシスコ会に入会。1599 年までアクイレイア大聖堂の音楽監督として知られている。またフェルモ大聖堂でも同じ地位に就く。保守的な対位法書法による宗教曲のみ現存している。

+Mortaro, Antonio　fl 1587-1610　イタリア

作曲家。1595 年、ブレーシアでフランシスコ会入会。98 年にはミラノのフランシスコ修道院でオルガニストの地位を得ている。1602 年にはノヴァラ大聖堂オルガニストになり、1606 年にはブレーシアに戻っている。彼は通奏低音前の時代と通奏低音のエポックの時代の間における伝統的な教会音楽の作曲家として最も重要な一人であった。カンツォネッタ、マドリガル、器楽曲（鍵盤楽器曲、リュート・タブラチュア）も多く残す。宗教曲の大多数はガブリエリの二重、三重合唱の伝統的な様式から、上 2 声が同じ音域で動き、バスが支えるコンチェルト様式に発展していく。彼の作品は広く人気を呼び、40 年以上も出版され続けた。

+Cocchi, Claudio　?-after1631　イタリア

作曲家。フランシスコ会士。1626 年、修道会の Magister musices のディプロマを与えられる。27 年から 30 年までトリエステ大聖堂のマエストロを勤める。32 年にはミラノのフランシスコ教会のマエストロ。彼の言によれば他に Olomouc, アヴィニョンの S.Severino Marche、アッ

シジのサクロ・コンヴェント（フランチェスコ大聖堂）にも勤める。また、Accademico Arrischiato detto l'Allegro'というアカデミーの会員でもあった。彼は 7 巻の出版楽譜があると述べられているが、消失している。

+Puliti, Gabriello　c1575-c1642　イタリア

作曲家、1600 年頃ポントレモリの修道院で合唱指揮者として着任前後にフランシスコ会に入会。1602 年にピアチェンツァの修道院のオルガニストになる。その後、プーラ、トリエステなどでオルガニスト、マエストロとして活躍。1606 年と 9 年の間はカポディストリアでオルガニストを勤め、09 年から 12 年まではトリエステにいた。14 年にカポディストリアに戻り、16 年にはピラーノにいた。後にカポディストリア修道院の院長に選ばれ、18 年から 20 年まで同地にいた。28 年、彼はアイスランド、パーゴの discretus に選ばれ、38 年頃、トリエステで活動をしめくくった。彼は多作だが、現存する作品は半数に満たない。現存している作品は多様で、現代的な部分と伝統的な傾向を両方見せている。モノディ様式を受け入れるのはゆっくりだったようで 1618 年の曲集からである。

+Debolecki, Wojciech　c1585-c1645　ポーランド

作曲家。1598 年にクラコフでフランシスコ会入会。1605 年から住んでいた Opole で 1611 年頃叙階。15 年~17 年の間は修道院で音楽の監督をしていた Kalisz, Lwow と Chelm に住む。1619 年から Olomouc にいた間、トルコ軍に捕虜になった兵士を助けるための協会を創設することに助力し、21~22 年は軍隊のチャプレンとして働いた。またローマで神学を 2 年間勉強し、25 年に学位をとる。その後ポーランドのフランシスコ会管区に戻るが、トルコ軍の捕虜の釈放のための委員になる。30~32 年はローマに住み、その後ポーランドに帰って Lwow の修道院で司祭として過ごす。彼が残した 2 巻の曲集は“Benedictio mensae cum gratiarum actione(1616)”と、“Completorium Romanum（1618）”である。前者はまだルネサンスの対位法様式を残している。後者は通奏低音によるバロック様式におけるポーランドの最初期の表れをみることができる。

+Lukacic, Ivan　1587-1648　クロアチア

作曲家。10 歳でコンヴェンツアル・フランシスコ会に入会。イタリアで神学と音楽を学び、1615 年、ローマで'Magister Musicus'の称号を取得。1618 年、Sibenik に戻るがやがて Split に行き、20 年に同地のフランシスコ会修道院長になる。彼は Sibenil の大聖堂で音楽監督を務めるかたわら院長職を務める。彼がイタリアからダルマチアに戻ったときはすでに同地では新しいモノディ様式が強くあらわれていた。彼が実質的にダルマチアのレパートリー貢献したのは唯一“Sacrae cantiones”(ヴェネツィア、1629）－Corpus Musicum Franciscanum（パドヴァ）に所収されている―のみである。1~5 声までの 27 のモテット集でオルガン通奏低音が付いている。Finetti の弟子だった可能性がある。

+Mersenne, Marin　1587-1648　フランス

数学者、哲学者、音楽理論家、碩学の人。17 世紀を代表する思想家の一人。彼はフランス思想界におけるルネサンスとバロックの重要な合流点に位置している。過去を総括し、未来に向けて新たな問題提起をした。彼は Le Mans の学校で最初の勉学を始めたが、1604 年から、La Fleche に新しく創設されたイエズス会の学校で、論理学、自然科学、形而上学、数学、神学を学ぶ。1609 年にはパリに行き、学問の仕上げをするため、王立大学とソルボンヌに学ぶ。1611 年、フランシスコ会に入会し、パリ近郊の Nigeon の修道院で修練期を始める。そして、モー近郊の St Pierre de Fublains で修練を終え、12 年 7 月 17 日に叙階される。それゆえ、パリ王宮内のフランシスコ会修道院に仕え、助祭にして司祭と言われた。14 年、ニヴェール近郊の修道院に派遣され、哲学教師（15－17 年）、神学教師（18 年）として働く。19 年にパリに戻り、たまに旅に出るとき以外はここで過ごす。

メルセンヌの作品はネオ・プラトニズムを反映している。その知識は、最初は宗教の擁護のために使われた。後の思想は包括的な知識と経験主義に基づいた科学的方法論の発達、唯物論的な原理に支配されている。彼の著作のなかで音楽は重要な役割を占めている。彼にとって音楽は分析可能で合理的に説明可能で科学の探求の一つである。24 の著作のうち 6 冊は音楽に捧げられている。“Harmonie Universalle”(1623), “Livre de la nature des sons(1625)”, “Traite de l’harmonie universelle(1634)”, “Harmoniucorum instrumentorum(1636)” などがある。彼はまた、子供や初心者を指導する教育的テクニックにも実践的な関心を示した。

+Papalia, Giovanni Maria　fl 1589-c1598 イタリア

マドリガル作曲家、フランシスコ会士。残っている唯一の出版は “Il primo libro de madrigali a cinque voci(Messina,1589)”。これは Fausto Bufalini によってメッシーナで出された印刷楽譜の最初期のもののひとつである。メッシーナの総督であった Cesare Gaetani に献呈された。現存する 21 のマドリガルのうち、10 曲は作者不詳であり、9 曲は Sannazaro の”Arcadia”からで、2 曲はペトラルカのカンツォニエーレから。彼の作品は Giovannelli, Macque, Marenzio らの影響を受けている。

+Fasolo, Giovanni Battista　c1598-after1664 イタリア

作曲家、オルガニスト、コンヴェンツアル・フランシスコ会士。若いときに南イタリアに移り住み、1627 年から 29 年の間にはローマにいた。彼の 2 冊のアリア集はこの時期に出版されている。この後、ナポリに滞在した後、47 年にローマに戻り、48，49 年はローマのサンタ・アポストリで音楽教師を勤めた。しかしその後シチリアに行きパレルモ近郊のモンレアールの枢機卿のマエストロの地位を得 64 年まで務める。宗教作品も世俗作品も残っている。年間の教会暦を通じて教区のオルガニストが使用できる “Annuale(1645)”は広くヨーロッパで知られた。彼による長い序文は当時のオルガン演奏実践についての貴重な情報を提供し

ている。彼自身の作詞による Arie spirituali は広く流行していたコンチェルタート様式で書かれている。この曲集のなかで彼は彼が作曲した宗教劇について述べ、それはパレルモで演奏されたらしいが楽譜は残っていない。

+Montalbano, Bartolomeo　c1598-1651　イタリア

作曲家。コンヴェンツアル・フランシスコ会。1619 年に入会し、ボローニャのフランシスコ教会に住む。22 年に着衣する。ローマに旅行したあと、シチリアの菅区長だったボナヴェントゥラ・アレッツォによってパレルモに呼ばれる。29 年に作品が出版されたとき、彼は同地のフランシスコ教会のマエストロであった。33 年に再びボローニャに戻り 42 年 4 月から没するまでそこでマエストロを勤める。29 年にパレルモで 2 冊の曲集を出版している。“Sinfonie ad uno, e doi violini, a doi, e trombone, con il partimento per l'organo…”と “Una messa a 4 voci” 彼はマリーニ、フォンターナ、コルテリーニと言った人々と共に近代ヴァイオリン奏法の基礎を作った一人である。ミサ曲のなかで彼は「サンクトゥスとアニュス・デイは短くしている。なぜならシンフォニアのための時間をとっておかねばならないから」と述べている。彼は聖ボナヴェントゥラに捧げたモテットがあるが、これは明らかに彼の霊父であるボナヴェントゥラ・アレッツォのためである。

＋Ferrari, Girolamo　?c1600-after1664　イタリア

作曲家。1624 年には Vimercare で働いていた。41 年から 4 年までノヴァラ大聖堂マエストロ。1664 年に Voghera でフランシスコ会に入会。5 声とオルガンのための “Missa, Psalmi et polytoni, op 1” が 24 年にヴェネツィアで出版されている。彼の作品は Giovanni Ghizzolo によって出版された。RISM1618(6),1623(12),1624(5)。アンソロジーに所収されたものとしては、RISM 1624(11),1645(1),1649(1),1653(1)

+Casati, Gasparo　c1610-1641　イタリア

作曲家。1635 年からノヴァラ大聖堂マエストロ。彼の作品の大多数は、友人であり、　音楽家、修道士であった Michelangelo Turriani によって出版された。出版者たちによって高く評価されたにもかかわらずそれらにはミスプリントが多い。現存する作品はすべて宗教曲である。当時、人気のあった彼のモテットは非常にエモーショナルな作風で、あまり典礼的ではない。Pater noster(主の祈り)さえもソロ・モテットとして作曲されている。

+Schwab, Felician　?-1611　ドイツ

作曲家。オルガニスト。1631 年に入会。Weingarten の修道院のギムナジウムで学ぶ。そこで修道院のオルガニスト、作曲家でもある Michael Kraf から最初の音楽教育を受ける。1630 年に Lucerne のイエズス会の学校に入るが同年、フランシスコ会に入会する。31 年に着衣し、洗礼名 Bonifacius のかわりに修道名として Felician を名乗る。彼は Konstanz の修道院とも関係を持っていたが、Lucerne に 39 年まで留まる。スイ

スの Solothurn のフランシスコ会修道院にオルガニストとして短期間滞在したあと、42 年までフリブールの修道院に所属する。その後 Solothun に戻り、45 年には Schwäbisch Gmünd のフランシスコ会修道院の院長になるが 51 年には分割のため小修道院のほうに移らなければならなかった。そこで 55 年まで院長を務める。彼の後期の出版物によると彼は自分を 'Argentorensis Provinciae Magister Capellae' あるいは 'Ordinis S.Francisci Argentoratensisi Provinciae Magister Musices' としている。45 年頃からはフランシスコ会の上部ドイツ管区での音楽活動を任されていたようである。彼の作品は宗教曲中心であるが、典礼のための音楽と特定の目的を含まない宗教作品、家庭用の作品などに分かれる。

+Cangiasi, Giovanni Antonio　?-c1614　イタリア

作曲家、オルガニスト、フランシスコ会士。1590 年にはヴェルチェリ大聖堂のオルガニスト、1602 年にはミラノのフランチェスコ教会オルガニスト。1607, 16011 年にはロカルノのフランシスコ会修道院にいた。1614 年には'Scherzi forastieri'を出版し、Voghera 近郊の Castelnuovo Scrivia のキエザ・マジョーレのオルガニストになる。3 声の'Sacrae cantiones'のパート譜はゴンザガの宮廷で高い地位にあったジョヴァンニ・ルッシオに献呈し、一方、一緒に出されたスコアは地方貴族であるフランチェスコ・トレヴァノに献呈されている。特定の聖人の祝日のためのモテットのシリーズのあとに一般的な内容が来て、最後に 8 声のマニフィカトで閉じられる。彼の詩編集"Psalmodia"は Apostolic Nuncio に献呈されている。ファルソボルドーネの書法を広く使い、最後は旋法の異なる 3 曲のマニフィカトで締めくくっている。翌年刊行された"Melodia sacra"は対話形式のモテットを含み、ミラノで彼とかかわりのあったカルロ・ボロメオの生涯を讃える内容になっている。"Udite verbum Domini"には、歌による対話に器楽が挿入される。彼はこれを発展させて純粋に器楽だけの"Scherzi forastieri"を書いている。これは確かに 1580 年ころに始まったミラノの器楽カンツォンの伝統のなかにある。同じ音域の 4 声部、多楽章で、主題の変奏を用いている。

＋Biondi, Giovanni Battista　fl 1605-30　イタリア

チェゼーナで生涯を過ごしたと思われる。フランシスコ会士（おそらくコンヴェンツアル聖フランシスコ会）。多数の教会音楽作品を生んでいるにもかかわらず教会で主要な地位を占めていない。ボローニャやファエンツァ近郊のブリシェラに暮らしていた時期もあった。彼は 1630 年におそらくペストで没した。彼の最後の出版作品は同年に別のフランシスコ会士の手によって出版されている。彼は 19 巻の宗教曲集を出版している。それらはは再版もされており、また 14 巻が現存する。またイタリアやドイツの曲集にも彼の作品はみられる。

+Finetti, Giacomo　fl 1605-31　イタリア

作曲家、コンヴェンツアル・フランシスコ会士。1605 年、6 年はイエ

ジ大聖堂の合唱長、1609 年から 12 年までは、アンコーナのサンタ・サクラメント大聖堂にいた。それ以外はヴェネツィアで過ごし、ヴェネツィア、サンタ・マリア・グロリオザ・デイ・フラリのオルガニスト、Ca'Grande の音楽監督をした。彼は新しいコンチェルタント様式が隆盛してきた時期の北イタリアにおける最も多産な典礼音楽作曲家の一人であった。

+Gallerano, Leandro　?-1631　　イタリア

作曲家、オプセルヴァント派のフランシスコ会修道士。1615 年にベルガモのフランシスコ会修道院でオルガニストをしていた記録がある。1620 年にブレーシアのフランシスコ会でも同様の地位を持った。1623 年 10 月 17 日にパドヴァのアントニオ大聖堂のマエストロに就任し、生涯その地位にとどまる。彼はブレーシアの Accademia degli Occulti の会員であった。彼の主な作品はミサ曲、聖務日課などの典礼音楽である。またパドヴァ大聖堂の守護聖人である聖アントニオのためのシュパイエルのユリアヌス（２ｐ参照）による聖務日課の楽曲 Gaudeat ecclesia, Sono tubae tympano(両曲ともアントニオ祝日のためのアンティフォナ）に作曲している。

+Navarro, Francesco　fl 1630-50　　スペイン

バレンシア出身の作曲家。理論書 "Manual ad usum chori juxta ritum"

+Cornetti, Paolo　fl 1638　　イタリア

作曲家、オブセルヴァント・フランシスコ会士。フェッラーラの Accademia dello Spirito Santo のマエストロ。唯一の出版作品は "Motetti concertati ...e nel fine le Letanie della BV op 1(ヴェネツィア、1638)"。これは 1~6 声と 1 あるいは 2 本のヴァイオリンと通奏低音のためのモテット集である。これらはその後も様々なアンソロジーに所収されて出版され続ける。RISM 1642(4),1646(4), 1647(3), 1659(3),1647(3). 彼はこのなかで限定された調性にこだわり、関係調で各楽章を統一する好みを示している。通奏低音楽器にヴァラエティを与えることで音色に豊かな変化をもたらしたことが特徴である。

+Rubino, Bonaventura　?~1668　　イタリア

作曲家、フランシスコ会士。1643 年から 1665 年までパレルモ大聖堂のマエストロを勤めた。彼はこの都市で音楽家としてまた修道者として活動し、当地では最も有名な作曲家であった。1644 年の 8 月にアッシジのフランシスコ大聖堂において Stellario の祝日に、詩編を作曲して荘厳な晩課を執り行った。ミサや聖務日課のための 7 冊の印刷楽譜を出版している。レクイエムを含む 8 曲のミサ、そして約 70 曲の聖務日課の作品、47 曲のモテットがある。すべてにオルガンの通奏低音が付き、二重合唱で両方の合唱隊にソリストがつく、あるいは第一グループがコンチェルタート、第二がリピエーノの様式になっている。彼の様式はモンテヴェルディの「宗教的倫理的森」に由来しており、処女出版の序文にもそのことが述べ

られている。音楽は非常に効果的にテキストを表出し、時折シャコンヌヤパッサカリアのようなオスティナートも用いられ、独自の個人様式を完成させている。

+Urio, Francesco Antonio　1631?-1719　イタリア

作曲家。コンヴェンツアル・フランシスコ会士。1679 年にはスポレト大聖堂のマエストロ、81 年から 83 年までウルビーノ、その後アッシジ、ジェノヴァ大聖堂のマエストロ。82 年にはスペッロのサンタ・マリア・マジョーレのマエストロに使命されているが、彼がそこに奉職した記録がない。彼の出版曲集 “Motetti di concerto, op1” のタイトルページによると、1690 年にはローマのサンタ・アポストリのマエストロであった。93 年から 95 年まではピストイアのマエストロ。“Salmi concertati, op 2” のタイトルページによると、彼は 97 年はヴェネツィアのフラーリ教会のマエストロ、そして 1715 年~19 年まではミラののフランシスコ教会でマエストロを勤める。宗教曲多数。特に Te Deum が有名で、ヘンデルがこの楽譜を借用して所有していたため、一時ヘンデル作という説もあった。他には、“Oratorio in honore di S Antonio dinPadova”, “Maddalena convertita”

+Angelli, Francesco Maria　1632-1697　イタリア

アッシジ出身の作曲家。Il Rivotorto とも呼ばれる。フランシスコ会士。ペルージャ、アッシジ、その後 1655－6 年はボローニャで学ぶ。フランシスコ会士として 56 年にボローニャのフランシスコ教会のマエストロをかわきりに、スポレト、パレルモ、そして最後はアッシジのフランシスコ大聖堂のマエストロになり、没するまで勤める。彼の指導のもとにこのバジリカは音楽的に著しく栄え、彼は対位法作曲家としての名声をほしいままにした。対位法についての短い論文 ‘Sommario del contrapunto’(*I-Bc* MS.1691)を書いている。アッシジ滞在中、彼はサクロ・コンヴェントの院長でもあり、その歴史を書き残している。作品はすべて宗教曲である。

+Buonamente, Giovanni Battista　?-1642 イタリア

作曲家、アッシジ大聖堂のマエストロ、ヴァイオリニスト、歌手。マントヴァのゴンザガ宮廷でモンテヴェルディのもとで働く。おそらくエレオノーラ・ゴンザガが 1622 年にフェルディナンド 2 世と結婚するにあたってウィーンへ随行した音楽家の一人である。少なくとも 26 年から 29 年まで皇帝の Musicista da camera という地位にあった。そして 1627 年のフェルディナンド 3 世のボヘミア王としての戴冠式にプラハの祝祭で大きな役目を果たした。彼は 31 年の初め頃まではこうして皇帝に仕えていたようである。31 年の 7 月、ベルガモのサンタ・マリア・マジョーレ教会に着任するための試用期間として晩課の音楽を担当する。そして採用され、3 年間、コントラアルト歌手、ヴァイオリニストとして求められたが、そこを去る。1632 年パルマの Madonna della Steccata の公爵の礼拝堂にヴァイオリストとして指名される。しかしパルマには彼の記録はそれ以上はない。次の、として最後のステップはアッシジの

フランシスコ大聖堂である。パルマからそこに到着したのは 1633 年の 2 月で、初めはヴァイオリニストとして、そして次にマエストロとして留まる。彼は音楽史上ではヴァイオリン音楽の作曲家として知られている。しかし 1647 年の目録をみると 160 曲以上の宗教曲を書き、ミサや聖務に器楽曲多数。アッシジで没。彼はチーマ、ロッシ、フォンターナらと並んでヴァイオリン音楽を開拓した初期の作曲家の一人で、アルプス以北の新しいヴィアオリン様式を紹介した。“Antiphone del primo e secondo Vespro, e de…primo e terzo notturno di S.Francesco” 自筆楽譜アッシジにあり。

+Chiodino, Giovanni Battista　fl 1610　イタリア

理論家、修道士。”Arte pratica Latina et volgare di far contrappunto a mente et a penna(1610)”の著者。これはモノディ様式が優勢になってきたときにイタリアにおいて、伝統的な対位法の技術と卓越性を擁護し続ける著作の一つである。

+Costa, Giovanni Paolo　fl1610-14　イタリア

作曲家、ジェノア生まれ。トレヴィソ大聖堂マエストロ、マドリガルを多数作曲。

+Bottazzi, Bernardino　fl 1614　イタリア

作曲家、理論家、オルガニスト、オブセルヴァント派のフランシスコ会士。“Choro et organo(1614)” で知られる。 これはオルガニストと合唱長のための典礼音楽の手引きで 18 章からなり、対位法の基本的な法則、正しく旋法で応えるオルガニストのための手引　き、単旋律聖歌をオルガンで正しく対旋律をつけて伴奏するための手引書となっている。オルガンの応答部分は楽譜が印刷されている。彼自身の作品もいくつか含まれ、３つのミサ曲、２つのクレド、年間のイムヌス、マリア・アンティフォナ、半音階的リチェルカーレなど。これらは明らかに教育的な目的であるが、決して生気を欠いたものではなく、音楽的にも、フェッラーラ・オルガン楽派の性格を備えている。リチェルカーレは非常に詩的であり、構成もよく、イムヌスはこのジャンルの最後の実例であり、興味深い。彼は地味な存在だったかもしれないが、彼の書は後期 16 世紀~17 世紀における単旋律聖歌を土台としたイタリア・オルガン音楽演奏法、伝統、形式の観点から大変興味深いものである。

+Viadana, Berardo Marchese da　fl 1616-27 イタリア

作曲家。パルマ近郊ヴィアダーナ市でフランシスコ修道院に入会。モデナで修道院長、聴罪司祭として過ごし、2 つの教会音楽の出版作品を残す。“Primavera ecclesiastica adorna di sacri fiori musicali(ヴェネツィア、1616)”、“Salmi vespertini...concertati　a　5 voci col basso continuo（ヴェネツィア、1617）”. そのなかから 7 曲のモテットがアンソロジーのなかで再販されている。RISM 1622(2), 1623(2), 1627(1),1627(2),1626(3) 作品数は少ないが、アルプス以北では人気を博した。その霊的豊かさによってすぐれた証聖者とみなされていた。

+Bellazzi, Francesco　fl 1618-28　　イタリア

作曲家。唯一知られている職歴は 1623~28 年までミラノのフランシスコ教会のマエストロを務めたということ。北イタリアの多くの教会音楽の作曲家の一人として典礼音楽を出版しているが、それらは教区のための作品である。当時のコンチェルタート様式を取り入れることに熱心ではなかった。聖務日課のための音楽がこれを反映している。8 声の晩課のための詩編（1618)。1620 年のモテット集はテクスチュアにオリジナリティが見られ、言葉の扱いが表情的である。

+Manfredi, Lodovico　fl 1620-38　　イタリア

作曲家、パルマ近郊グアスタラで生まれる。次の３巻の教会音楽で知られる。

“Il primo libro di concerti ecclesiastici a due, tre, quatro e sei voci, con una messa a cinque concertata(Venice, 1620)”, “Dulcisona cantica ad Dei, et suae immaculatae genetricis honorem, op 2(Venice, 1633), “Concerti ecclesiastici a 1-5 voci…libro secondo, op3(Venice,1638)”

+Chylinski, Andrzej　fl 1625-35　　ポーランド

作曲家、歌手、フランシスコ会士。1625 年、Drohiczyn, Podlaski にあるフランシスコ会修道院の音楽監督になる。1630 年、イタリアに向けて出発し、音楽家として司祭としてパドヴァのアントニオ大聖堂の職につく。やがてバス歌手として聖歌隊に入る。32 年にマエストロに就任するが、軋轢がひどくなったため、そこを去り、35 年にはポーランドに戻る。唯一知られている作品集は “Canones XVI idem ad diversa rectis contrariisque motibus toti intoto….(アントワープ、1634)” これは Da pacem に基づくカノン集。ベネツィアでパズル・カノンを出版したとも伝えられる。

+Ganassi, Giacomo　fl 1625-37　　イタリア

作曲家、トレヴィソ生まれ。ヴェネツィアの北、ベルーノのフランシスコ教会のマエストロを 1625 年から 1634 年まで勤める。彼は教会音楽しか書かなかった。そして当時流行していた小規模なコンチェルタート様式のモテットよりも、むしろ大規模なミサや晩課を作曲した。”Vespertina psalmodia, 8-9vv(Venice,1625)”, ”cclesiastici Missarum,5,9-10vv(Venice,1634)”,”Vespertina almodia(Venice,1637)”

+Picerli, Silverio　fl 1629-31　　イタリア

理論家、神学者。オブセルヴァントのフランシスコ会司祭。叙階されたことによって作曲ができなくなる。1629 年にはナポリの聖マグダレーナ修道院院長。31 年に聖キアラ修道院に居住する。彼は３つの論文を書いた。

“Specchio primo di musica(ナポリ、1630)/secondo di musica（ナポリ、1631)/terzo di musica(1630)” そして Specchio terzo は Specchio primo のなかで予告されているが、現存していない。Specchio primo のなかで彼は、臨時記号の増大によって必要性が生じたソルミゼーション

の新しいシステムを提唱した。secondo はほとんどが対位法を扱うが、オリジナルなものはなく、すでにある規則を明確化している。また、seconda prattica に立脚して、喜び、悲しみ、嘆き、失望などの言葉の意味にしたがって協和音、不協和音を使っていくテキストの扱いに留意している。旋法の数について述べた 18 章は興味深い。3，4，7，14 の旋法システムは否定され、単旋律聖歌は伝統的な 8 つの旋法を使う。そして一方ポリフォニーはより不規則な旋法を 4 種類使うと結論している。彼の著作はペンナ、ボノンチーニ、ベラルディ、ピトーニに影響を与えている。

+Aloisi, Giovanni Battista　fl 1628-44　イタリア

作曲家、神学者、ボローニャ生まれ。ウディーネ近郊のサチーレ大聖堂のマエストロを勤め、後に 1628 年、ボローニャでフランシスコ会でも勤める。他の何人かのイタリア人とともに、Olomouc の司教、また枢機卿 Franz von Doetrichstein のもとで 31 年から、枢機卿が没する 36 年まで働く。37 年にウィーンで “Contextus musicarum” を出版している。作品のほとんどは教会音楽で、様式は同時代のものを踏襲している。古様式で書いたものもあり、冒険のないそれらは現代的な書法の作品とコントラストをなしている。“Coelestis Parnassus”, “Celeste Palco” “Harmonicum Coelum” “Contextus musicarum” “Corona stellarum”など宗教曲集を出版。

+Berthod, Francois,　fl 1656-67　フランス

作曲家、詩人。コンヴェンツアル・フランシスコ会士。“Le vray chemin du ciel pour les agonisans(1656)”,“Emblesmes sacrez tires de l’Escriture saincte(1655-65)”, “L’histoire de la passion de N.Sauveur Jesus-Christ(1666)”といった著作がある。彼は、宗教的コントラファクタを生み出したことにおいて特筆される 17 世紀の宗教的人物の伝統を継承した。モビュイッソン、ヴァル・ド・グラースの修道女のリクレーションのために Robert Ballard による “Airs de devotion a deux parties”を書く（パリ、1656, 1658, 1662）。通奏低音がつくものとつかないものがあり、旋律はリュリ、ランベール、ムリーニのようなよく知られたエアーで、世俗音楽起源のものが多い。彼はもとの旋律をそこねないように、できる限り少ない変更で言葉を変えたと説明している。また、彼は典礼からとったラテン語（グレゴリオ聖歌）に当てはめた無伴奏のソロ・モテット “Parolles tres devoes mises en chant pour glorifier Dieu pendant l’elevation”(パリ、1665）を出版した。フランソワ・パスカルと共に、トリエント公会議以後多くの変更をこうむったローマ典礼の改訂版に着手し、“Service de l’eglise(1667)”としてラテン語聖歌をネウマで出版した。

+Abbate, Carlo　c1600-after1640　イタリア

理論家。ジェノア生まれ。フランシスコ会士。, Olomouc の枢機卿 Franz con Dietrichstein、モラヴィアの統治者のチャプレン。おそらく St.Oslowan の神学院で音楽を教えていた。1632 年にイタリアに戻り、

神学院生徒のために対位法の音楽のテキストを作る。“Regulae contrapuncti excerptae ex operibus zerlini et aliorum ad breviorem(1629)” タイトルはラテン語だが中身はイタリア語。内容は保守的で、独自のものがあるわけではなくツァルリーノとその周辺の理論に従っている。

+Sant'Agata, Tommaso da　fl 1636　　イタリア

作曲家。オブセルヴァント派のフランシスコ会。1617 年、ウルビーノ公国のフランシスコ会の院長代理。Della Rovere 家の最後のメンバーが死に、ウルビーノ領土が教会に併合された後、1636 年頃、ローマに移って同様の地位を得る。

“Motecta…libre primus”(RISM 1636(3), 1637(1)), “Regulae breves et faciles cantus decclesiastici(Urbino, 1617)がある。彼のモノディのモテットは非常に旋律的で半音階が多い。フェティスによれば“Regulae breves et faciles cantus ecclesiastic”(ウルビーノ、1617）の著作があるが今は失われている。)

+Passarini, Francesco　1636-1694　　イタリア

作曲家。1652 年にボローニャのフランシスコ会に入会。1662 年から 63 年までフェッラーラでオルガニストを勤め、何人かの研究者は 1663 年にはコレッジョに、64 年にはボローニャに、66 年にはラヴェンナにいた、とする。しかし確実なのは 66 年から 72 年にかけてボローニャのフランシスコ教会のマエストロであったということである。72 年にはペルシチェートの教区教会、サン・ジョヴァンニ教会のマエストロにも任命されている。73 年にヴェネツィアに移り、サンタ・マリア・デイ・フラーリ教会のマエストロを 80 年まで務める。一旦ボローニャに戻るが、91～92 年にはフィレンツェのサンタ・クローチェ教会のマエストロを務める。彼はマントヴァと関係を持ち、作品 3 はイザベラ・ゴンガーツァに献呈している。作品の大多数は教会音楽で、17 世紀中葉の典型的なコンチェルタート様式である。多くの手稿譜が残されていることから彼の人気が伺える。自筆譜の目録を見ると多くの作品が消失していることもわかる。

+Reina, Sisto　?-after1664　　イタリア

作曲家、オルガニスト、ミラノ近郊サロンノ生まれ。フランシスコ会修道士。1648 年から少なくとも 1653 年までサロンノのマドンナ･デイ･ミラコリの聖堂のオルガニストを勤めた。1656 年にミラノでフランシスコ会に入会し、60 年にピアチェンツァのフランチェスコ教会のマエストロになる。1662 年にはモデナで聖バルトロメオ教会のオルガニスト、フランチェスコ教会のマエストロになるが 64 年には最初の職に戻る。彼の作品はあきらかにこれらの教会で演奏されるために書かれた。これらは典型的な当時の教会音楽の様式をとり、アッシジやパドヴァからの影響は受けていないことを示している。同時代の軽い様式のソロソナタやトリオソナタを好まず、より堅固な対位法的テクスチュアを好み、4 つのヴァイオリンと通奏低音のようなものに力を入れた。ベネディクト会

女子修道院、修道女に作品を献呈。“Novelli fiori ecclesiastici, op 1(1648)”、“Marsyae, et Apollini de musices principatu, op 4”、“Armonia ecclesiastica, op 5”、“Rose de concertati odori, op 6(1656)”（コモの聖チェチリア修道院の修道女ローサ・アントニア・トリアーナに献呈)、“Fiorita corona di Melodia celeste, op 7(1660)”（ボローニャの聖ジョヴァンニ・バチスタ修道院のオルガニスト、エルミニア・カテリナ･マンツォーリ修道女に献呈)。出版はすべてミラノでなされている。

+Schwilge, Andreas　c1608-1688　アルザス

ドイツ系のアルザスの作曲家、教師。父から歌、ヴァイオリン、オルガンを学んだあと 1623 年から 28 年までアンジスハイム、アルザスのイエズス会の学校で学び、その後ヴルツブルクで哲学を学ぶ。その後フランシスコ会に入会。ルツェルンで修練の間フリブールで哲学の勉強を続ける。ウィーンで 4 年間、神学を学ぶ。ローマとミラノへ旅した折にカトリシズムの衰退を確信し、スイスに戻って、説教師、哲学と音楽教師の地位を得る。チューリッヒの大聖堂の先唱者、ドイツ人学校の歌唱教師に任命され、1646 年には大聖堂の音楽監督に任じられる。ウルムに行き 1659 年から 81 年までルター派教会の監督やギムナジウムの教師も勤める 48 年にチューリッヒで 37 の 4 声部楽曲 “Teusche Gedichte”をグディメルの音符対音符の様式で作る。1653 年にまた 30 曲を加え、63 年には通奏低音つきの 6 つのモテットを作曲。

+Steingaden, Constantin　c1618-1675　ドイツ

ドイツの作曲家。スイスで活動。1631 年にルツェルンでイエズス会の学校に入り、1644 年にフランシスコ会に入会し、エンゲルベルクに住む。そこでは主にオルガニストとして知られていた。後にコンスタンツのフランシスコ修道院、大聖堂のマエストロとなり、終生そこにとどまる。コンスタンツで Flores hymnales prompti ex horto a 3, 4 vocibus(1666)を出版。また同年にインスブルックで器楽も伴う“Messe concertate” を出版。様式的には新旧の混合であるが、時には表情的なソロの旋律は広い視野を持つ多くのパッセージを含む。一方、古い教会旋法も用いている。

+Mattioli, Andrea　c1620-1679　イタリア

作曲家、1646 年にイモラ大聖堂司祭およびマエストロ。その後、フェッラーラのサン・ロマーノ教会の vicar としての記録が残る。1650 年までにはフェラーラのアッカデミア・デル・スピリト・サントのマエストロになり、同市のためにオペラを作曲している。少なくとも 1656 年から没するまでの間、マントヴァ候宮廷マエストロ。1658 年にはローマのサン・ピエトロの教区に住む外国人としての登録されている。Schmidl によると彼はフランシスコ会士だったと伝えられる。オペラを多数作曲するがほとんど消失。宗教曲は現存。

+Cappelli, Bartolomeo　fl 1645-53　イタリア

音楽編集者、作曲家、修道士。1653 年の出版物によると、「音楽教師」

と呼ばれていた。1645 年の“Selecti concentica Psalmorum”のなかで 5 声部の小さな宗教曲集を出版している。（RISM 1645(1)）。また RISM1650(2) にも所収される。1653 年の“Messa et salmi conhcerttati…”においては Francesco Vannarelli の作品集とともに、自作の 3 曲を所収している。

+Cesti, Antonio　1623-1669　イタリア

作曲家、歌手。この時代の最もすぐれた作曲家の一人。アレッツォで少年聖歌隊として音楽教育を受けたあと、1637 年ヴォルテッラでコンヴェンツアル・フランシスコ会入会。フィレンツェのサンタ・クローチェで修練期を過ごし、生まれ故郷のアレッツォで修道院に入り、1640 年と 42 年にはそこに滞在していた記録がある。43 年にヴォルテッラ大聖堂のオルガニストになる。わずかの間サンタ・クローチェのオルガニスト、またフランスカン・セミナリーの音楽教師。メジチ家の保護を受けていた。ヴェネツィアで多くのオペラを書き、成功を収める。オペラ、世俗カンタータ多数。教会音楽は極めて少ない。

+Vacchelli, Giovanni Battusta　c1625-c1667 イタリア

作曲家、オルガニスト、フランシスコ会修道士。“Il primo libro primo de Motetti concertati, op 1(1646)”によると、ルビエラで初めてオルガニストとして指名された。1657 年にボローニャのフランシスコ教会オルガニストとなる。“Motetti a voce sola, libro primo, op 2(1664)”によると、その前年にはフランシスコ会音楽教師を務めていた。少なくとも 1664 年から 67 年までは Accademico Naufragante という名のもとで Accademia della Morte at Finale di Modena の会員だった。そのとき彼は“Sacri concerti a 1-4 voci con violini senza libro secondo, op3(ボローニャ、1667)”を印刷し、ペーザロのマエストロでもあった。これら出版作品が彼の全作品であろう。小規模の宗教作品から成るので、自分の教会で演奏するための作品ばかりであろう。

+Baldrati, Bartolomeo　c1645-?　イタリア

イタリアの作曲家、フランシスコ会士。“Messe a 4 voci a capella, op 1(ボローニャ、1687)”が彼の名のもとで出版された時、リミニのフランシスコ教会のマエストロであった。アイトナーによると、２つのミサ曲（１つは 24 声）と５～６声のモテットをわずかに残している。

+Duponchel, Jacques　?-1685　フランドル

作曲家、オルガニスト、コンヴェンツアル・フランシスコ会士。イタリアで活躍。イタリアに行った時期も、フランシスコ会入会時期も不明だが、彼の出版楽譜に‘Duaceno in Flandria Minorum Conventualism S Francisci’と記されている。また同じ史料から 1665 年にはローマのサンタ・アポストリのマエストロであったことも確認出来る。1671 年にオシモの Cardinal Bicchi のためのオルガニストになる。76 年から 83 年まではオシモ大聖堂のオルガニスト。出版作品は“Psalmi vespertini una cum litanies, op 1”, “Sacrae cantiones una cum litanies, op 2”、

“Messe concertate, op 3”, “Domine, probasti”が残されている。

+Caianu, Ivan　1627-1698　トランシルヴァニア

楽譜編集者、オルガニスト、オルガン建築家、神学者、司祭。Manastur でイエズス会の学校で音楽を学ぶ。自分の出身であるオーソドックスからカトリックに改宗し Csiksomlyo にあるフランシスコ会修道院学校に入るそこで 1650 年、オルガニスト、教師に任命され Trnava のフランシスコ会神学校で哲学、神学の勉学を続ける。1655 年、叙階され聖職につくが、若いころから学んでいたオルガンの勉強も続け、またオルガン製作者、オルガン復元にも携わる。1663 年から Mikhaza の、1669 年からは Szarhegy の修道院長になる。彼は聖座の許可を得て印刷所を持ち、神学、音楽作品を刊行始める。彼の多方面にわたる活躍が教皇グレゴリウス 11 世の目に留まり 1678 年、彼はトランシルヴァニアの司教代理に命じられるが、宗教的な陰謀のためわずか 4 ヶ月で退いた。彼はヨーロッパで名声を得た最初のトランシルヴァニア人である。彼の“Cantionale Catholicum”は広く用いられ少なくとも 1805 年までは何版も重ねた。彼の名声は主に、ドイツ式オルガン・タブラチュアで記譜された手稿譜で残るアンソロジーによっている。 1 つは “Organo Missale”－これは 39 のミサ曲と 53 の連祷からなる。もうひとつはいわゆる Codex Caioni といわれるもので彼が編纂した楽譜である。これらは彼の音楽知識の広さ、普遍性を示し、また東と西の伝統の架け橋にもなるものである。彼の作品はリズム、旋律、ハーモニーともに強い国民性を示し、ハンガリーやルーマニアの民俗音楽を思わせる。また西洋の 16～17 世紀の著名な作曲家たちの作品の写しも含む。

他には “Antiphonale Romanum...ad usum ecclesiae Romanae", "Cantus Catholici”など典礼聖歌本が多数ある。

+Angleria, Camillo　1630-?　イタリア

理論家、フランシスコ律修第三会員。作曲をメールロに師事。Lucchini によれば 1622

年にはフィレンツェ宮廷のマエストロであった。しかし長くは続かなかった。Marco da Gagliano がその後まもなくその地位についた。彼の理論 “”La Regola del contraponto e della musical compositione(1622)”において、彼は非常に厳格な対位法を扱い、数学的に構築していく。この意味で彼はツァルリーノに密接に固執する者の一人であると言える。しかし彼はプリマ・プラティカの結果としてのセコンダ・プラティカを擁護している。彼はメールロを絶えず参照しながら、音程、調性、模倣、2 声あるいはそれ以上の声部の作曲、2 重対位法などについて論じている。理論書のなかで実例を示すときは、自分自身のリチェルカーレや友人であったチーマのカノンやリチェルカーレを引用している。

+Castrovillari, Daniele de fl 1660-62　イタリア

作曲家、オルガニスト。La Borde は彼をフランシスコ会修道士で理論家と記している。Nicola Papini によれば長年フェラーラ大聖堂でオルガニストを勤めていたということだが、これは確証がない。ヴェネツ

ィアでオルガニストとして活動しているが、パドヴァのアントニオ大聖堂の主席オルガニストである‘Fra Daniele’というのは彼のことであろう。ヴェネツィアではオペラも作曲していたようである。彼の音楽は質の高いものではなく、むしろ場合によってはぎこちないこともある。マントヴァ候にいくつかの声楽曲を献呈している。“Miscellanea Francescana 25(1925), 13 [Musicisti minori]”

+Souhaitty, Jean Jacques　c1650-?　フランス

理論家　フランシスコ会士としてパリに住み、初心者に歌唱やグレゴリオ聖歌を教えるのに、簡易な記譜法を考え出したが、一般的には適用されなかった。彼はダイアトニックの音階に１－７の番号付けをし、様々なシンボルを用いて音楽の特徴を示そうとした。旋法、拍子、メンズレーション、装飾音の適用など同様に、変化音、特殊なピッチ、音域などについて。彼は記譜の実例をデュモンや、ニヴェールを含む典礼音楽から引用した。彼のシステムは受け入れられなかったが、同時代の人々の間では少しの間興味をもたれ、Jean-Benjamin de La Bordeが、ルソーはこのシステムを自分のものとして“Projet concernant de nouveaux signes pour la musique”のなかで述べているのは盗作だと主張している。“Essai du chant de l’eglise par la nouvellemethode des nombres(1679)”

+Scorpione, Domenico　fl 1627-1703　イタリア

作曲家、理論家。コンヴェンツアル・フランシスコ会士。1672 年から 1674 年までボローニャのフランシスコ教会、1675 年と 1703 年にはローマのサンタ・アポストリのマエストロ。1702 年にはメッシーナ、ベネヴェント大聖堂のマエストロを勤めている。残されている彼の教会音楽は保守的な様式である。彼の理論書“Riflessioni armoniche”は思索的な章も含み、同時代の音楽思想に関する知識の豊富さを示している。また、プリマ・プラティカの伝統における厳格な対位法教程の章もある。“Instruzioni corali”は単旋律音楽のマニュアルである。

+Tevo, Zaccaria　1651-c1709　イタリア

理論家、作曲家。1665 年、3 月トレヴィソでフランシスコ会の門をくぐり、1667 年に入会。初期の音楽教育は F. M. Angeli 師から受けたようである。彼はパドヴァ、マチェラタ、フェルモ、ヴェネツィアを初め様々の都市で勉強した。最終的にトレヴィソで学業を完成し、1678 年に叙階。翌年より、管区長、合唱指導、マエストロ、オルガニスト、と歴任し、1705 年頃にはトレヴィソを去る。1706 年にヴェネツィアで“Il musica testore”を出版。これは何年にもわたって書かれたもので、ギリシャ、ラテン、イタリア語による中世の理論書集であり特にフランシスコ会の教育の目的がある。あらゆる理論的な問題をカバーしており当時広く賞賛された。作曲家としてはモテットを 2 冊出しているが 2 冊目だけが残っている。

+Nassarre, Pablo　c1654-c1730　　スペイン

理論家、作曲家、オルガニスト。幼少からの盲人デ、パブロ・ブルーナにオルガンを学ぶ。22 歳でフランシスコ会に入会。サラゴサのフランシスコ会で教会オルガニスト。“Fragmentos musicus(1683)”は音楽の作例も豊富で、2 版を重ね、長く用いられた。4 つの章に分けられ、グレゴリオ聖歌、定量記譜法、対位法、不協和音処理などを扱う。対話形式で進められ、実践的なことに集中している。彼は読者に自著 “Escuela musica(1723)” について言及するが、このときはまだこれは準備中で、1723~4 年になるまで完成しなかった。彼の言葉によると彼はこの著作に 50 年の歳月をかけた。2 巻に分かれ、全体で 1000 ページ以上ある。20 の章からなり、思索的なものから実践的なものまで包括的である。グレゴリオ聖歌、リズム、多声音楽の旋法のこと、器楽全般のこと、和声、厳格対位法、自由作品、演奏実践―特に装飾―、教会音楽の実践について、述べられている。彼はスペインの伝統を忠実に守り、イタリアの新奇なものは排除した。彼の作品は疑いもなく後のスペインの理論家たちのなかでは権威を持った。ビリャンシーコ、オルガン曲を残している。

+Predieri, Angelo　1655-1731　　イタリア

音楽教師、歌手、作曲家。Marco Filippo と Virginia Vignoli の間の子供。音楽を Camillo Cevenini, Agostino Filipucci に学ぶ。1671 年にテノール歌手としてアッカデミア・フィラルモニカに入る。また、72 年にはフランシスコ会律修第三会員になり、修道名をアンジェロと名乗る。サンタ・マリア・デッラ・カリタのマエストロ。弟子のなかにマルティーニがいる。マルティーニは彼を師として高く評価。彼は 5 声と器楽の「キリエ・エエイソン」、ソプラノとアルトと器楽の「クリステ・エレイソン」で知られている。失われてしまった詩編の一部はマルティーニが “Esemplare o sia Saggio fondamentale pratico di contrappunto fugato(1775, ボローニャ)” のなかで引用している。

+Calegari, Francesco Antonio　1656-1742　イタリア

作曲家、理論家。ヴェネツィアの Palma del Friuli 修道院でフランシスコ会に入会した。アッシジのフランシスカンセミナリーで学ぶ。ロッティについて対位法を学び、1700 年にボローニャのフランシスコ教会のマエストロになる。1701 年から 03 年までヴェネツィアのサンタ・マリア・グロリオザ・デイ・フラーリ教会、03 年から 27 年までパドヴァのアントニオ大聖堂マエストロ。その後ジュゼッペ・アントニオ・リナルディの跡をついでフラーリでマエストロになり、最後までそこで過ごす。存命中はその作品と音楽理論の該博な知識で有名であった。マルチェロは彼の詩編集 “Estro poetico-armonico” と “Trattato teorico musico” を彼に送って批評を仰いでいる。それに対する彼の手紙はマルチェロの詩編とともに出版された。彼はラモーとほとんど変わらない時期に和音の転回の理論を解いた。それは 1721 年の Kyrie の通奏低音に明らかに示されているが、ラモーと違って彼はそれを出版しなかったのであまり広く影響を及ぼさず、ほとんど彼の生徒たちの範囲であった。しかしそのなかにはフランチェスコ・アントニオ・ヴァロッティがいた。彼の最

も重要な理論書“Ampla dimostrazione degli armoniaqli musicali tuoni(1732)”は不協和音の処理についてなどいくつかの新しい独自の考えを含んでいる。彼の初期の作品は明解なテクスチュアの通奏低音様式が多かった。しかしパレストリーナを学んだ者として、また自分自身の理論の発展のためもあり、8 声の華麗な響きをもつ多声合唱曲も書いた。衝撃的な不協和音使用とその解決を示す作品が多い。また彼は同時代の他の多くの理論家と違い、自著のなかで音響学や数学については述べていない。宗教曲多数。聖スランシスコに関する作品に[Mass Fest St.Francis(1700) 4vv strs,bc] [Salve sancte pater(I-Af155/5)]がある。

+Martin y Coll, Antonio ?-after1733 スペイン

作曲家、オルガニスト、理論家。カスティリア出身。幼少の頃からアルカラのサン・ディエゴ修道院で生活していた。アンドレス・ロレンツのもとでオルガンと音楽を学ぶ。フランシスコ会に入会し、その後もしばらくオルガニストとしてサン・ディエゴに留まる。1707 年以降、マドリッドのフランシスコ大教会のオルガニストとなり没するまでそこに留まる。彼は典礼実践について“Arte de canto llano”を書き（1714）、その後 1728 年に“Arte de canto de organo”を、また 1734 年に“Breve suma de todas las reglas de canto iilano y su explicacion”付加した。また Flores de musica の名のもとにオルガン音楽の重要な写本を 4 巻編纂した。ほとんどの楽曲は作者不詳で Corelli, Denis Gaultier, Hardel が唯一名前とともにある作品だが、Heredia, Cabanilles, Cabezon, Frescobaldi などの作品も（名は記されていないが）アイデンティファイされている。彼は 5 巻目の写本集として”Ramillete oloroso: suabes flores de musica para organo”で自作を所収している。彼の作品として知られる唯一の楽曲である。225 のヴェルセット、17 のカンシオン、シンフォニア、パンジェ・リンガなど。これらはほとんどが月並みなものである。

+Lazzari, Ferdinando Antonio 1678-1754 イタリア

作曲家、オルガニスト、歌手、1613 年、ボローニャでフランシスコ会に入会、修練期の間にすでに歌手、オルガニストを勤める。しばらく音楽の勉強のためにボローニャを離れ、その後 1702 年にボローニャに戻るとただちにフランシスコ教会のマエストロになる。1705 年まで勤め、その後ヴェネツィアのサンタ・マリア・グロリオサ・デイフラーリ教会のマエストロになる。1712 年、ボローニャのカタリナの列聖のための祝典のためにボローニャに呼び戻され、7 月 12 日にそのための作品が演奏される。再びヴェネツィアに戻るが、病を得て、視力を失い、故郷のボローニャに帰還してそこで没する。モテットを数曲、またパドヴァのアントニオを描いたオラトリオなどを作曲。

+Benedetti, Francesco Maria 1683-1749 イタリア

作曲家、司祭、アッシジ生まれ、洗礼名はジョヴァンニ・ドメニコ・アントニオであったが 1699 年 11 月 25 日に修練者としてフランシスコ会に入会するときにフランチェスコ・マリアを名乗った。2 ヵ月半をア

ッシジのフランシスコ大聖堂で奉仕したあと、1704 年にチッタ・デ・カステッロに行く。おそらくそこで終世誓願。パドヴァのアントニオの祝祭のために呼び戻され、1706-7、フランシスコ大聖堂の主席オルガニスト、11 年からマエストロ。1706 年に教皇クレメンス 11 世より叙階され、司祭になる。07 年にトゥーリンに移り 11 年まで留まる。11 年の 10 月 3 日に Urio の後任としてアシジ大聖堂の 15 年にアカデミック・カンタータ "Dialogo Della irtu e della Fama"、"Virtu e Honore"を書いている。また、教会会議のメンバーになり一般信徒の告解を聞く資格を得る。16 年にアッシジを去り、トゥーリンのフランシスコ教会で 21~22 年頃までマエストロを勤める。22~27 の出版物を見ると、この間にアオスタ大聖堂でもマエストロを勤めていたようである。27 年に一時アッシジに戻り、その後ウルビーノ大聖堂のマエストロに使命されたが、修道会以外のところでの地位に就くことを禁じられたため、受けることができなかった。アッシジでベネデッティは宗教の義務と音楽の仕事を両立させた。多作な作曲家であり、年毎の重要な祝日を精力的にオーガナイズし、教師としてマルティーニから高く評価される。41 年、彼は修道院のなかに自室を建てる許可を得た。これは彼の功績を証しするものであろう。彼の "Compiete"、"Mute di psalmi pieni"などは 19 世紀半ばまで歌われ続け、死後ただちに忘れられるということはなかった。270 もの作品（ほとんどが宗教曲）が残され、自筆楽譜、同時代の筆写楽譜はアッシジ、アオスタ、ボローニャに残る。フランシスコのための作品としては "Prodiit de caelo(I-Af 1733)"

+Cernohorsky, Bohuslav Matej　1684-1742 ボヘミア

作曲家、オルガニスト、司祭。最初の音楽のてほどきは父親から、次にイエズス会で教育を受けた。1700 年-02 年までプラハ大学で哲学を学び、そこで傑出した音楽理論家、Tyn 教会のオルガニスである Tomas Baltazar Janovka に出会う。Janovka は彼の音楽理論理解を深め、チェコや外国の音楽を紹介した。そして彼の注意はプラハの旧市街にある聖ヤコブのフランシスコ教会に行き、偉大な芸術家であり修道会の権威でもあった Bernhard Artophaeus(1651-1721)に出会う。おそらくこのため彼はバカロレアを採るとすぐに大学を去り、フランシスコ会に入会する。 1704 年入会、1708 年叙階されている。アッシジ大聖堂オルガニスト（1710－15）、パドヴァのアントニオ大聖堂オルガニスト（1715－20）、アッシジに Padre Boemo di Praga というサインの自筆譜があり。他宗教曲多数。パドヴァに 800 以上のマニュスクリプトあり。タルティーニの教師でもある。またオペラ作曲家グルックは、彼によって教会音楽を学びイタリア音楽にも目を開かれ、彼はプラハのテーン教会で「グルックが演奏するために編曲をしたと伝えられる。

+Vaňura, Ceslav　1694-1736　　チェコ

作曲家、フランシスコ会士。1734 年にプラハの聖ジェームズ修道院の主席オルガニストに任命された 2 年後に出版された "Cultus latriae op 2" によると彼はそこの"regens chori"とされている。35 年には 'Magister musicae' の称号を与えられる。彼はプラハのフランシスコ

会修道院で先輩の Cernohorsky と仕事をした可能性があるが、弟子ではなかったようだ。様式的には Cernohorsky や Simon Brixi に近く、後期バロックの手法でコンチェルト様式と対位法様式で書いている。フーガ “Laudetur sanctissima Trinitas” は Cernohorsky の “Laudetur Jesus Christus”をモデルとしている。テキストに絵画的な解釈を行い、オーケストレーションも多様でブラスに力点を置いている。

+Nachini, Pietro　1694-1769　イタリア

オルガン製作者。Sebenico で哲学を、ヴェネツィアで神学を学んだあとフランシスコ会に入会。ヴェネツィアで Giovanni Battista Piaggia のもとでオルガン製作者となり、そのすぐれた技術によりヴェネツィア、ダルマチア、その周辺地域で第一人者のオルガン製作者という名声を確立した。29 年に短期間ピエラントーニ、ペスチェッティのもとで働く。彼のもとで発達したイタリア・オルガンは２つのすぐれたオルガンをヴェネツィアに残した。１つは 1737 年に聖マルチノ教会のために建造された organo doppio。これは 2 段鍵盤を有するが、この時代のイタリアには珍しいことであった。2 番目は 1751 年、聖マリア・デイ・デレリッティのための一段鍵盤のオルガン。これは 1983 年に再建されている。約 500 台のオルガンを製作し、イタリア・オルガン史上に特筆される存在になる。弟子のなかには Francesco Dacci, Gaetano Callido, Franz Xaver Chrismann がいる。

+Cordans, Bartolomeo　1698-1757　イタリア

作曲家。1724 年、ヴェネツィアでフランシスコ会に入会。オブセルヴァント・フランシスコ会士でありながら、教区司祭を勤めた。1735 年ウディーネ大聖堂マエストロに任命され、没するまでそこに留まる。28 年から 31 年の間には劇場でも活躍し（ヴェネツィアの S Cassiano と S.Moise）、数ヶ月の間、アントニオ・ポッラローロに代わり Ospedale dei Derelitti の maestro per modum provisionis であった。オラトリオ「聖ロムアルド」が彼の作品に帰せられているが、実際、それは Francesco Rossi の作品である。ウディーネ大聖堂のマエストロになってからは宗教曲のみを書く。しかしヴェネツィアとは関係を持ち続け、（特に Ospedale della Pieta と）、またボローニャのアッカデミア・フィラルモニカの会員でもあった。そしてそこのために大規模なコンチェルタント様式の作品も書いている。彼はまたア・カペラ様式も開拓し、パレストリーナに啓示を受けた “Dodici Messe a Cappella, ed una per gli Anniversari(1756)”も作曲している。彼の典礼作品―２～３声と通奏低音―はイタリア中の様々な聖堂の図書館に残っており、イタリア以外にもオーストリア、ドイツ、スロヴェニアにも残る。弟の Giuseppe マリアもオブセルヴァントであり、“Regola per appremdere il canto firmo” が残っている。

+Vallotti, Francesco Antonio　1697-1780　イタリア

作曲家、理論家、コンヴェンツアル・フランシスコ会士。ヴェルチェリ大聖堂（S Eusebi のフランシスコ会修道院）で Beccaria 師に見出さ

れ、同大聖堂のマエストロ、Bissione のもとで勉強する。神学、哲学に興味を持った彼はさらに勉学を続け、18 歳で Chammbery を訪れて、フランシスコ会に入会する。そして 16 年に誓願、20 年には司祭叙階される。その後一時期 Cuneo で哲学者 Castellani のもとで勉強したあと、Castellani の保護を得て、ミラノで神学者 D.F.Donati のもとで学ぶ。Donati がパドヴァに移ると彼もそれに従ってパドヴァに行く。彼の音楽の勉強はパドヴァ大聖堂のマエストロであった Calegariri のもとでなされたとされている。彼は 28 年に Albri の跡を継いで翌年 2 月までアントニオ大聖堂のオルガニストとなる。1725 年、Alessio Quadrio の跡を継いでパドヴァの第 4 オルガニストになり、27 年、パドヴァの作曲家 Rinaldi が Calegari の跡を継いでマエストロになったとき、彼も助手として給料はあがっていった。29 年 Rinaldi が没すると彼がマエストロに就任する。16 人の歌手とタルティーニをリーダーとする 16 人の弦楽合奏団をかかえ Vandini が主席チェリストであった。また管楽器奏者もいてオーボエ、トランペット、また Vallotti の音楽はバスーンやホルンも必要としていた。彼はオーケストラを指揮し、タルティーニらヴァイオリニストは通奏低音に従って即興演奏をした。そのオーケストラのレベルや規模は 49 年の大聖堂の火災以降は衰退していく。合唱音楽に関して、彼は 16 世紀の厳格な対位法様式を守った。彼はパレストリーナやポルタ、他のルネサンスの作曲家たちの数々のミサ曲のトランスクリプションをした。彼の対位法作曲家としての名声は他のフランシスコ会士たちーボローニャのマルティーニやヴェネツィアのパオルッチ、アッシジのベッリたちを刺激し、演奏や勉強のために彼の楽譜が求められた。フリードリッヒ大王はベルリンの聖ヘドヴィヒ大聖堂の献堂式のために彼にミサとテ・デウムの作曲を委嘱している。そのすぐ後、パラティネ選帝侯、カール・テオドールは彼に金メダルを授与している。彼は 19 世紀にも影響を与え、ヴェルディは彼をイタリアで最も偉大なハーモニストとして崇敬し、作品に引用している。

+Vinas, Francisco　fl early 18th　　スペイン

作曲家、1716 年から 30 年まで Jaca 大聖堂のマエストロを勤める。そこに彼に帰せられる 100 の宗教曲が残る。ほとんどが 5~8 声の通奏低音付の楽曲である。その他、5 曲のミサ、4 曲のマニフィカト、ラメンタツィオ、詩編、モテット、ビリャンシーコなどがある。他の宗教作品は Calahorra, Pamplona, Albarracia の、聖堂に残る。

+Ugolinus, Blasius　c1700-1771　　イタリア

理論家、ヘブライ語、古典学者。もともとユダヤ人であったが、フランシスコ会に入会。ヘブライ語、その他の古語の学者として、主に 17－18 世紀のユダヤ古代に関するキリスト教著作（自身のものも含めて）を編纂し出版する。“Thesaurus antiquitatum sacrarum(1744-69)” は 34 巻からなり、ミシュナ、バビロン、パレスチナのタルムード、ラビの著作などのラテン語翻訳を含む。23 巻（1767）は聖書の音楽に関する巻で、ラテン語による 46 のエッセイである。それらのうち多くは大規模論文―メルセンウ、アタナシウス・キルヒャー、アウグスティヌス・

カルメトなど、彼の読書歴を示すものである。とりわけ重要なのは彼自身によるラテン語翻訳による、哲学者アブラハム・ポルタレオーネのShiltei ha-giborim(1612)である。それは古代神殿とその音楽について述べられている。

+Martini, Padre Giovanni Battista　1706-1784 イタリア

著述家、教師、作曲家。ボローニャ生まれ。彼が没した折、「我らの時代の音楽の神」と言われたほど当時最も有名な音楽家であった。最初の音楽教育はヴァイオリニスト、チェリストであった父親のマリア・アントニオから受けた。そのあとはアンジェロ・プレディエリ、ジョヴァンニ・アントニオ・リチエリ、フランチェスコ・アントニオ・ピストッチ、ジャコモ・アントニオ・ペルティ。1721 年、修道者になることを志した彼はルーゴ・ディ・ロマーニャのフランシスコ会修道院に行く。22 年にはボローニャに戻り、フランチェスコ教会のオルガニストを務める。25 年、フェルナンド・グリディの跡をついでフランチェスコ教会のマエストロになる。彼は生涯の最後までその職に留まり、協会に敷設する修道院で生活した。25 年に入会し、4 年後に司祭叙階されている。24 年から作曲を始めているが、最初の出版物は“Litaniae atque antiphonae finales Beatae Virginis Mariae”。58 年、彼が 52 歳の時、Accademia dell'Istituto delle Scienze di Bologna の会員になり、同年、Accademia Filarmonica の会員にもなる。76 年にローマで Arcadian Academy の会員になり、Aristosseno Anfioneo の名を受ける。しかし彼は作曲、著作、教育に人生を捧げ、生涯、ほとんどボローニャを離れることはなかった。59 年にフィレンツェ、ピサ、シエナに旅している。ヴァチカン、あるいはパドヴァからも求められたが、彼は生地ボローニャを離れることを好まなかった。78 歳まで生きたが、健康にもあまり恵まれなかったので旅行は少なかった。彼のフランシスコ会における後継者は Stanislao Mattei である。彼は論争をして個人的に人と争うことは極力避けたが、自説は固く守った。彼は主として教師としての名声が高かった。少なくとも 69 人の作曲家を教え、また少なくとも 35 人の者が何らかの教えを受けている。著名な人物のなかでは、J.C.Bach, Bertoni, Gretory, Jommelli, Mozart, Naumann がいる。彼は基本的に対位法を教え、優秀な生徒にはアッカデミア・フィラルモニカへの入会の準備をさせた。また数多くのソルフェージュの教材を残していることから、歌唱教育にも力を入れた。彼の弟子達のネットワークは彼の楽譜蔵書、また音楽関係文献の蔵書収集家としての彼の活動を知る上で重要である。彼はおそらく教育から得る収入で音楽蔵書を増やしていった。バーニーは 1770 年に 17000 冊を鑑定している。彼の最も重要な遺産は膨大な往復書簡である(約 6000 通)。そのなかの有名な人物を揚げると、Agricola, Burney, Gerbert, Locatelli, Marpurg, Metastasio, Quantz, Rameau, Soler, Tartini…これらは 18 世紀の音楽生活を知る上で貴重な史料である。マルティーニの音楽史家としての位置は大型の 3 巻本に完成された”Storia della musica” にある。手稿で残された 5 巻のうちの 4 巻に彼の中世音楽に関する見識がみてとれる。彼は 16 世紀音楽の伝統の枠を超えることはなかった。しかし Storia della musica は単旋律聖歌につ

いて価値ある考察が含まれる。音楽作品は約約 1500 残っている。

+Paolucci, Giuseppe　1726-1776　　イタリア

作曲家、理論家、1750 年代にマルティーニのもとで勉強。師と同じコンヴェンツアル・フランシスコ会士。この時期に書かれた 8 つの宗教作品がボローニャ・コンセルヴァトワールの図書館に残る。彼からマルティーニに宛てた約 150 通の手紙がこの 2 人の親密さを示している。56 年から 59 年まで、ヴェネツィアのサンタ・マリア・グロリオザ・デイ・フラーリ教会のマエストロ、70 年からはセニガリアのサンタ・マルチノ教会、その後アッシジのフランシスコ大聖堂マエストロを亡くなるまで勤める。アッシジで没したため多くの自筆譜がアッシジにある。最もよく知られた論文は"Arte pratica di contrappunto"。これはマルティーニの Esemplare ossia Saggio fondamentale pratico di contrappunto を規範としている。しかしマルティーニが 16 世紀を中心に論じているのに対し、彼は 18 世紀のバッハ、ヘンデルを多く譜例に挙げている。200 以上の宗教曲を残している。

+Ricci, Francesco Pasquale　1732-1817　イタリア

作曲家。中産階級の家に生まれ、自由主義的な教育を受ける。特に音楽をミラノで Vignate より受ける。フランシスコ会に入会し、修道院長も勤める。1759 年、コモ大聖堂マエストロに就任したにもかかわらず、68 年から 77 年までの長期にわたってすべての責務を休み旅に出ていた。パリ、ロンドン、デン・ハーグなどの大都市でコンサートをし、宮廷や諸侯に作品を献呈した。この時期、シンフォニー、カルテットなどを含む多くの作品を書き、パリ、アムステルダムなどで出版した。彼の名声は "Dies irae" の初演のインパクトで広まり、出版もされる。Fayoll によれば、クーポラから鳴り響く Tuba mirum のトランペットの導入による saint effroi に衝撃を受けた、という。しかしこの効果は彼にとってははじめての試みではなかったのだが。彼の名は J.C.Bach の "Methode …pour le forte piano(Paris,c1788)"に出てくる。彼らが交友があったかどうかは定かではないが、2 人の共通のパトロン Count Litta を通じてミラノで出会っている可能性もある。

+Sabbatini, Luigi Antonio　?1732-1809　イタリア

理論家、作曲家。コンヴェンツアル・フランシスコ会士。彼の最初期の作品 Benedictus sit Deus(2 声と通奏低音)は 13 歳で作曲されており、マルティーニの弟子になる前から音楽の基礎があったことを示している。ボローニャのフランシスコ会修道院において 8 年間、マルティーニ師のもとで学んだと考えられている。1750 年代に、彼はフランシスコ会に入会したと思われる。マルティーニ宛ての 202 通の手紙が 64 年から 84 年の間に残されている。64 年にはすでにマルティーニの生徒ではなかった。67 年 11 月に、彼の故郷の近くマリーノの聖バルナバ教会のマエストロになる。フランシスコ会の枢機卿 Ganganelli(後のクレメンス 14 世教皇)と知己を得たことによってこの地位を得たと思われる。そしてまた後に同じように、1772 年 4 月にローマの S. Apostoli のマエストロに就任す

る。 パドヴァのアントニオ大聖堂のマエストロ・ディ・カペッラであった Vallotti は死ぬ間際になって彼を後任にすることに同意し、Vallotti の死後サッバティーニは 80 年から 86 年まで勤める。再び彼は満場一致でアントニオ大聖堂に招かれ没するまで勤める。1807 年アッカデミア・イタリアーナの会員に選ばれる。知られている作品のほとんどは宗教曲で、多くは当時の様式を踏襲している。しかしいくつかはフーガなど厳格な対位法をとり、カントゥス・フィルムス様式で書かれたものもある。彼の作品は Atto di contrizione(２ソプラノと通奏低音)が存命中出版された。彼の理論書は重要なパドヴァ楽派の Calegari, Vallotti, Tartini などと並ぶ。彼はパドヴァ楽派の外の理論家たちとは違い、子供の基礎教育にも興味を示していた。

+Cattenacci, Gian Domenico　?-c1800　　イタリア

オルガニスト、作曲家、教師。オブセルヴァント派の修道士。ミラノの聖アンジェロ修道院に住む。1779 年、ミラノ大聖堂のマエストロの試験の審査員を務めた。多くの生徒にオルガンを教えた。当時イタリアのほとんどのオルガン演奏や作曲はオペラやコンサートホールの様式の影響を強く受けている中で、彼は楽器のポリフォニックな性格、対位法的テクスチュアを強調した。オルガン曲多数。"Sonata d'organo(1791)/I-Af" “Raccolta di versetti fugasi (1794)”

+Mattei, Stanislao　1750-1825　　イタリア

教師、作曲家、コンヴェンツアル・フランシスコ会士。マルティーニの弟子であるとともに後に最も親しい友人となった。1770 年からボローニャのフランシスコ教会でマルティーニと働く。76 年には彼の後継者として公式に認められマルティーニの死後は跡を継ぐ。89 年に聖ペトロニオ教会のマエストロに就任。80 年にモデナでアッカデミア・フィルハルモニカの会員に、99 年にはボローニャのフィルハルモニカの会員になる。1804 年、リチェオ・フィラルモニカの創立に当たっては対位法と作曲の教師になる。彼の生徒のなかにはドニゼッティ、ロッシーニがいる。1809 年の短い間パドヴァのアントニオ教会のマエストロも務める 24 年にはフランスの王室機関であるアカデミー・ボザールの準会員に選ばれる。彼はマルティーニから由来する 18 世紀後期ボローニャ楽派の伝統において非常に保守的な作曲家であった。ロッシーニは教師としての彼を絶賛している。彼の唯一の理論書 “Pratica d’accompagnamento sopra bassi numerati”は 19 世紀の間もフランスで翻訳され、広く用いられた。300 以上の宗教曲を残している。弟の Clemente Mattei はアッシジのフランシスコ大聖堂の作曲家でやはりマルティーニの弟子である。
“Introit Salve sancte Pater(I-Af 1075)”

+Marsand, Anselmo　1769-1841　　イタリア

作曲家、オルガニスト。サン・マルコ大聖堂のマエストロ Bonaventura Furlanetto のもとで勉強し、はじめベネディクト会、後にフランシスコ会に入会。ヴェネツィアにおける最後の最も秀でた古典作曲家である。彼の 600 の作品は豊かなインスピレーションを示している。初め、ムラ

一ノのベネディクト会修道院で、その後、サンジョルジョ・マジョーレ、聖ヨハネ・パウロ聖堂で働いたあと、1829 年 Antonio Calegari の跡を継いでパドヴァのアントニオ大聖堂のマエストロ。32 年にそこを去り、ヴェネツィアに戻る。

+Pintaric, Fortunat　1798-1867　クロアチア

作曲家、オルガニスト。Varazdin と Zagreb で F.Langer と J.K.Wisner-Morgenstern から音楽の教えを受ける。そして 1821 年にフランシスコ会に入会。ザグレブのフランシスコ修道院で歌、オルガンを教える。ピアノ曲、愛国的なものも含めて作品多数。クロアチアの伝統的な語法で作曲を試みる。“Knjiga bogol jubnosti karstijanske”（1849）これは 45 のクロアチアの讃美歌集で、ウィーンで出版。また 378 のラテン語、クロアチア語による教会音楽集“Crkvena lira”を出版。その他クロアチア語のミサ曲を残す。

+Singer, Peter　1810-1882　オーストラリア

作曲家、理論家、オルガニスト、合唱長、楽器製作者。音楽はほぼ独学で、9 歳のときに、ピアノとオルガンを学ぶ。同時にヴァイオリン、ハープ、フルート、クラリネト、ホルンも。11 歳の時に、和声と通奏低音を Reutte で P.Mauritius Gasteiger に習う。Hall のギムナジウムに通い（1824－30）、オルガンとピアノのレッスンをオルガニストの Ignaz Heinz より受ける。1830 年にザルツブルクでアルカンタラのペトロの名でフランシスコ会に入会し、34 年に叙階。1837 年から 40 年までボルツァノ、インスブルックでオルガニスト、合唱長を務め、残りの人生はザルツブルクのフランシスコ会修道院で過ごす。1845 年に Pansymphonikon（リードのある鍵盤楽器）を創ったことで有名。これは 2 段鍵盤で、４２のレジスターがあり、オーケストラを模倣したものである。彼は観想的な著作、特に合唱の歌唱についての論文“Cantus choralis in provincia Tirolensi Fratrum Reformatorum Consuetus”(ザルツブルク、1862)、また“Metaphysische Blicke in die Tonwelt nebst einem dadurch veranlassten neuen System der Tonwissemnschaft”（ミュンヘン、1847）を書いた。彼は音楽理論を神学、哲学で基礎付け、3 和音を三位一体と結びつけ他のすべての響きと旋律を被造物、あるいは発出したもの、ととらえた。彼は多作で、ミサ曲を 102，モテットを 141、聖母のリタニーを 15，テ・デウムを 7 曲、アントニオのレスポンソリウム 14 曲、タントゥム・エルゴを 78 曲書いている。また、ドイツ語のイムヌスやオルガンのスケッチなど。彼の作品にはテキストの自由な処理、多様な形式、民族的な旋律や豊かなハーモニーが見出される。またピアノスタイルにおけるオルガンの使用なども重要である。

+Sattner, Hugolin　1851-1934　スロヴェニア

作曲家、1867 年に入会。74 年叙階。Novo Mesto でオルガニスト、音楽教師を努める。1890 年から亡くなるまで Ljubljana で聖歌隊の指導をし、国内外の広いレパートリーを扱う。彼は初期に作曲を試みたこともあったが 50 歳になってから和声と対位法を Matej Hubad に学ぶ。

これによって彼は“Missa seraphica”, “Te Deum”やカンタータなどを作曲する。これらはスロヴェニア教会音楽の発達に重要な役割を果たした。大規模作品を得意とし 1911 年にオラトリオ、“Assumptio Beata Mariae Virginis”を完成、一般人に強くアピールした。シンフォニック・カンタータ“To the Olive Tree”(1914), “On the Night of Ash Wednesday” “In St Cecilia's Crypt” などを書く。

+Hartomann an der Lan—Hochbrunn,Paul 1863-1914 ドイツ
作曲家。オラトリオ “Francesco”(1902)がある。

+Arregui, Jose Maria c1875-1955 スペイン
作曲家。10 歳の時に Arantzazu, Guipuzcoa でフランシスコ会の学校に入り 1895 年にフランシスコ会に入会し、音楽の勉強を続ける。ペルーに宣教に行き、1912 年帰国。Goberna と B. Horges のもとで音楽教育を完成させる。ピアニストとして演奏旅行するかたわら、1918 年には Arantzazu の聖歌隊の指揮者となる。アラゴン, Caspe に Orfeon Caspolina を設立しバルセロナの Orquesta Serafica Antoniana の指揮者となる。スペインの他の聖職者－作曲家と同様に、教会音楽に関しては 1903 年の教皇ピオ 10 世の Moto proprio に従い、20 世紀の美学とは程遠い教会音楽を作曲した。 “Missa sanctus Franciscus,4vv” “Benediction de San Francisco,6-7vv”などほとんどが教会音楽である。また Himmo a Bilbao”－ビルバオの聖務日課賛歌－を編纂した。

+Donostia, Jose Antonio de 1886-1956 バスク
作曲家、音楽学者。1896 年に Lecaroz でカプチン会の学校に入り、Ismael Echazarra から和声、作曲法を学ぶ。1903 年カプチン会入会。1908 年、叙階。バスク民謡を収集、研究する。バルセロナで Adrian Esquerra から、またサン・セバスチャンで Bernard Gabiola から対位法のレッスンを受ける。1909 年ベネディクト会、シロス修道院で Casiano Rojo Olalla 師より、また 1915 年には Besalu で Mauro Sabrayrolles 師グレゴリオ聖歌を学ぶ。たびたびバルセロナに行き、グラナドスやフェリペ・ペドレル、また詩人の Apelles Mestres, Llorencs Riber と親交を持つ。1918 年、教育の義務から離れ、音楽のキャリアを高めるために、パリに旅行し、ラヴェル、ルーセルと出会う。そして Eugene Cools のもとで 1920 年から 21 年まで学ぶ。スペイン内乱のため 43 年までフランスに留まり、その間にアンリ・ゲオンと組んで、「アッシジの聖フランシスコの生涯」「グレッチョのクリスマス」(舞台音楽)や「フランシスコのトリプティク」を作曲。その年、Lecarz に戻り、44 年にバルセロナのスペイン音楽学会の民俗音楽部門のチーフになるよう求められる。そこで彼は音楽学者として、また作曲家として活動する。53 年にバルセロナを去り、Lecarz に戻り、没するまで研究、作曲を続ける。バスク語アカデミーの会員でもあり、2000 ものバスクの旋律を収集し、編集し、バスク音楽についての最初のモノグラフィ “Musica y musicos en el pais vasco(1951)”を出版する。作曲家としてはほとんど独学である。２つの要素－グレゴリオ聖歌とバスク民謡に基づいて作曲し

ている。

+Rizzi,Bernardino　1891-1968　　イタリア

作曲家。1910～1911 年までクラコフで神学を学んだ後、コンヴェンツアル・フランシスコ会に入会。哲学を学んだ後、ローマとパドヴァの教皇庁立神学院で神学を学び、Pontificia Scuola Superiore de Musica Sacra で 17～19 年まで在籍し、グレゴリオ聖歌のディプロマを取得。パドヴァの Pollini Institute で作曲を学び、22 年、クラコフに戻る。同地で２つの合唱団、Chorus Caecilianus, Cecylianski Choir を創立し、ポーランドと諸外国で様々なコンサートを行った。クラコフ音楽院の作曲教授、Zelenski School of music でもオーケストレーションと作曲を教える。34 年と 40 年に再びイタリアに行き、トレヴィソその他で数々の教会音楽のポストに就いた後、ヴェネツィアの Cappella ai Frari の合唱長となり、64 年に引退するまで勤める。作品はほとんどが宗教曲で、聖フランシスコ関連の作品を残している。カンタータ "Il cantico di Frate Sole", オラトリオ "Santo Francesco", "Cantico delle Creature", "Salve sancte Pater"の自筆譜がアッシジにあり。

+Bruning, Eliseus　1892-1958　　オランダ

音楽学者、聖歌学者。スピラのユリアヌスの韻文聖務日課についての論文で学位をとる。"Officium et Missa de Festo Sancti Patris Nostri Francisci"(Tournai,1926)などをはじめとしてフランシスコ会の聖歌本の編集に携わる。またオラトリオ「聖アントニオ」を作曲。

略語

AH＝Analecta Hymnica Medii Aevi. Dreves, Guido Maria & Blume, Clemens(Ed)　1889-, Leipzig

RISM=Repertoire International des Sources Musicales, Henle Verlag

索引

Abbate, Carlo・・・・・２１
Aiguino da Brecia Illuminato・・・・・５
Aloisi, Giovanni Battista・・・・・２１
Ammon, Blasius・・・・・９
Angelli, Francesco Maria・・・・・１８
Angleria, Camillo・・・・・２５
Arregui, Jose Maria・・・・・３６

Bacon, Roger・・・・・1
Balbi, Lodvico・・・・・８
Baldrati, Bartolomeo・・・・・２４
Bartholomeus Anglicus・・・・・1
Bellazzi, Francesco・・・・・２０
Belli, Giulio・・・・・１１
Benedetti, Francesco Maria・・・・・２８
Bermudo, Juan・・・・・５
Berthod, Francois・・・・・２１
Biondi,Giovanni Battista・・・１６
Bona, Valerio・・・・・１１
Bonaventura da Bresia・・・・・４
Borsano, Arcangelo・・・・・９
Bottazzi, Bernardino・・・・・１８
Bruning, Eliseus・・・・・３７
Buonamente, Giovanni Battista・・・・・１８

Caianu, Ivan・・・・・２５
Calegari, Francesco Antonio・・・・・２７
Cappelli, Bartolomeo・・・・・２３
Cangiasi, Giovanni Antonio・・・・・１６
Canuzi, Pietro de・・・・・５
Cartari, Giuliano・・・・・８
Casati, Gasparo・・・・・１５
Castrovillari, Daniele de・・・・・２５
Cattenacci, Gian Domenico・・・・・３４
Cernohorsky, Bohuslav Matej・・・・・２９
Cesti, Antonio・・・・・２４
Chiodino, Giovanni Battista・・・・・１９
Cisneros, Francisco Jimenez・・・・・４
Cocchi, Claudio・・・・・１２
Colombani, Oratio・・・・・８
Cordans, Bartolomeo・・・・・３０
Cornago, Johannes・・・・・３
Cornetti, Paolo・・・・・１７

Costa, Giovanni Paolo・・・・・19
Chylinski, Andrzey・・・・20

Debolicki, Wojciech・・・・・13
Diruta, Girolamo・・・・・10
Donostia, Jose Antonio de・・・・・36
Duponchel, Jacques・・・・・24

Egidius de Zamora・・・・・3
Enrico da Pisa・・・・・1

Fasolo, Giovanni Battista・・・・・14
Ferrari, Girolamo・・・・・15
Finetti, Giacomo・・・・・16

Gallerano, Leandro・・・・17
Ganassi, Giacomo・・・・・20
Ghizzolo, Giovanni・・・・・9
Graziani, Tomaso・・・・・10

Hartomann An der Lan・・・・・36
Haymo of Faversham・・・・・1

Jacopone da Todi・・・・・2
Johannes de Erfordia・・・・・3
Julian von Speier・・・・・2

Lazzari,Ferdinando Antonio・・・・・28
Lukacic, Ivan・・・・・13

Manfredi, Lodovico・・・・・20
Marsand, Anselmo・・・・・34
Martin y Coll Antonio・・・・・28
Martini, Padre Giovanni Battista・・・・・32
Mattei, Stanislao・・・・・34
Mattioli, Andrea・・・・・23
Mersenne, Marin・・・・・14
Molina, Bartolome de ・・・・・5
Montalbano, Bartolomeo・・・・・15
Mortaro, Antonio・・・・・12

Nachini, Pietro・・・・・30
Nazzarre, Pablo・・・・・27
Navaro, Juan・・・・・10
Navaro, Francesco・・・・・17

Paolucci, Giuseppe · · · · · 3 3
Papalia, Giovanni Maria · · · · · 1 4
Pasquale, Bonifacio · · · · · 6
Passarini, Francesco · · · · · 2 2
Piccioli, Giacomo Antonio · · · · · 7
Picerli, Silverio · · · · · 2 0
Picitono, Angelo da · · · · · 5
Pintaric, Fortunat · · · · · 3 5
Pioninier, Johannes · · · · · 5
Porta, Costanzo · · · · · 6
Predieri, Angelo · · · · · 2 7
Puliti, Gabriello · · · · · 1 3

Ratti, Bartolomeo · · · · · 1 2
Reina, Sisto · · · · · 2 2
Rizzi, Bernardino · · · · · 3 7
Ricci, Francesco Pasquale · · · · · 3 3
Rubino, Bonaventura · · · · · 1 7
Ruffino d'Assisi · · · · · 4

Sabbatini, Luigi Antonio · · · · · 3 3
Salinbene de Adam · · · · · 2
Sant'Agata, Tommaso da · · · · · 2 2
Sattner, Hugolin · · · · · 3 5
Schwab, Felician · · · · · 1 5
Schwilge, Andreas · · · · · 2 3
Scorpione, Domenico · · · · · 2 6
Singer, Peter · · · · · 3 5
Sorte, Bartolomeo · · · · · 7
Souhaitty, Jean Jacques · · · · · 2 6
Steingaden, Constantin · · · · · 2 3

Tevo, Zaccaria · · · · · 2 6
Thomas de Celano · · · · · 1
Tunstede, Simon · · · · · 3

Ugolinus, Blasius · · · · · 3 1
Urio, Francesco Antonio · · · · · 1 8

Vacchelli, Giovanni Battista · · · · · 2 4
Vallotti, Francesco Antono · · · · · 3 0
Vaňura, Ceslav · · · · · 2 9
Vecchi, Orfeo · · · · · 9
Vespa, Girolamo · · · · · 8
Viadana, Berardo Marchese da · · · · · 1 9

Viadana, Lodovico · · · · · 1 1
Vinas, Francisco · · · · · 3 1
Waldis, Burkhard · · · · · 4

Zaccardi, Florido · · · · · 1 2
Zarlino, Gioseffo · · · · · 6